

平成17年度課題研究講座
「高等学校における国語教材の充実」研究報告書

高等学校国語科における 論理的思考力の育成に関する研究

- 論理を意識させるための教材開発を中心に -

平成18年3月

三重県教育委員会事務局研修分野（三重県総合教育センター）

研究成果報告書 目次

はじめに	1
研究の進め方	
1 本研究における論理的思考力の定義	1
2 研究方法	2
研究内容	
1 現状分析	
(1) 教師の意識	2
ア 「国語力向上モデル事業」推進校の報告から	
イ 研究メンバーのとらえた高校生の現状	
(2) 高校生の意識	4
2 教材開発と授業構想	
(1) 【教材1】山田真哉「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」	5
ア 教材について	
イ 授業構想および評価について	
(2) 【教材2】辺見庸「マスクメロン」	6
ア 教材について	
イ 授業構想および評価について	
3 授業実践	
(1) 【教材1】「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」の実践	9
・ 県立桑名工業高等学校	
・ 県立亀山高等学校	
・ 県立津西高等学校	
・ 県立久居高等学校	
・ 【教材1】の総括	
(2) 【教材2】「マスクメロン」の実践	13
・ 県立桑名工業高等学校	
・ 県立亀山高等学校	
・ 県立津西高等学校	
・ 県立久居高等学校	
・ 【教材2】の総括	
成果と課題	
1 成果 ～研究を通して明らかになったこと	19
2 今後の課題	20
おわりに	21
資料	
・【教材1】テキストおよびワークシート	23
・ 同 学習指導案	28
・【教材2】テキストおよびワークシート	31
・ 同 学習指導案	37
・ 授業の感想および生徒自己評価	40
・ 平成17年度課題研究講座「高等学校における国語教材の充実」研究の流れ	46
・ 共同研究者	48

はじめに

今、国語力の育成をめぐる様々な指摘がなされている。ここ2、3年を振り返っても、国レベルでの話題が少なくない。2003年度には文部科学省の「国語力向上モデル事業」が実施され、全国192の学校が国語教育推進校として指定された。その翌年には、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」が出されている。2005年に入り、国立国語研究所が日本人の国語力について半世紀ぶりの大規模調査を行う方針を固めたことも記憶に新しい。なかでも2004年12月、OECDのPISA調査（学習到達度調査）で、日本の15歳の「読解力」が低下したことは大きく報じられ、注目された。文部科学省もこれを重く受け止め、専属の研究チームを発足させた。2005年12月にその研究成果をまとめた「読解力向上プログラム」が発表されたばかりである。

PISA調査の「読解力」とは「Reading Literacy（リーディング・リテラシー）」の訳語である。テキストの内容をただ読み取ればよいのではなく、「書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する」ことが求められている。したがって問題も、テキストを分析したり、テキストに基づいて自らの意見を論理的に記述したりするものが相当数出題されている。調査に関する論文等において「考える力」「論理的思考力」という言葉が目立ったのもそのためである。

論理的思考力が話題になる背景には、国際化、情報化などの時代の流れがある。変化の激しい時代にあつて、主体的に考え判断する力、論理的に意見を述べる力が求められている。1989（平成元）年版の高等学校学習指導要領では、国語科の目標に「思考力を伸ばし」という文言が復活した。現行の1999（平成11）年版においても、論理的思考力・表現力の重要性が強調されている。PISA調査の結果を受けて、今後さらに思考力重視の傾向は強まっていくと思われる。

一方で、ビジネスの世界に目を転じると、書名に「ロジカル」「論理的」という言葉の入ったビジネス書が数多く出版されていることに気づく。欧米型のロジカル・シンキングやコミュニケーション・スキルが広く話題になるとともに、日本の学校教育でこのような領域がほとんど扱われていないという問題点が指摘され、改めてビジネスの現場でスキル・トレーニングを行うようになってきているのも事実である。社会の変化とともに、こういった技術面でのニーズが高まっていると言えるだろう。

教育現場からの指摘については後述するが、コミュニケーションの力とかかわって論理的思考力の低下を危惧する声が多い。自分の考えや思いを整理し、相手にわかるように筋道を立てて述べる力に課題があるとの指摘である。このような力を生徒にどうつけていけばよいかという思いは、日々生徒と接する立場であれば、誰もがもっているのではないだろうか。

以上のことから、本研究では、国語力のなかでも特に論理的思考力に焦点をあてることにした。生徒の興味を喚起する教材を用い、本文に根拠を求めながら自らの論理を組み立てる授業を展開すれば、生徒に筋道を立てて考えることの大切さを実感させることができるのではないか。このような考えのもと、論理を意識させる教材の開発を目指した。開発教材を用いた授業を構想し、実際に授業を行うことによって教材の適否を検証するとともに、論理的思考力の育成に資する教材と指導について考察することを本研究の目的とする。

研究の進め方

1 本研究における論理的思考力の定義

研究を進めるにあたり、本研究で「論理的思考力」をどうとらえるかについて述べておく。文化審議会の答申「これからの時代に求められる国語力について」（2004）では、国語力の中核を成すものとして「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の四つの力が掲げられている。「考える力」については以下のように述べられている。

考える力とは、分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力である。/分析力は、言語情報に含まれる「事実」や「根拠の明確でない推測」などを正確に見極め、さらに、内在している論理や構造などを的確にとらえていける能力である。また、自分や相手の置かれている状況を的確にとらえる能力でもあり、知覚（五感）を通して入ってくる非言語情報を言語化する能力でもある。/論理構築力は、相手や場面に応じたわかりやすく筋道の通った発言や文章を組み立てていける能力である¹⁾。

また、古くからこの分野の研究を続けてこられた井上尚美氏によれば、「論理的思考力」の概念は

- (1) 形式論理学の諸規則にかなった推理のこと（狭義）
- (2) 筋道の通った思考、つまりある文章や話が論証の形式（前提 - 結論、または主張 - 理由・根拠という骨組み）を整えていること
- (3) 直観やイメージによる思考に対して、分析、総合、抽象、比較、関係づけなどの概念的思考一般のこと（広義）²⁾

と整理されている。「筋道の通った」ということが両者に共通しているが、これは、学習指導要領解説においても、思考力や論理的に表現する力にかかわって繰り返し述べられていることである。

本研究では、上に引用した考え方を踏まえつつ、「論理的思考力」を「筋道を立てて物事を考える力」と定義する。得られた情報を分析し、自らの考えを筋道を立てて構築する、その一連の流れを論理的思考ととらえ、研究を進めていくこととする。

2 研究方法

- ・ 「国語力向上モデル事業」推進校の問題意識、研究メンバーのとらえた生徒の現状等から、論理的思考力にかかわる課題を整理する。
- ・ 整理した課題を踏まえ、論理的思考力の育成に資する教材を開発する。
- ・ 開発した教材を用いた授業を構想し、研究メンバーの所属校で授業実践を行う。
- ・ 実践結果をもとに教材や授業構想の適否を検証し、論理的思考力の育成に資する教材と指導についての考察をまとめる。

研究内容

1 現状分析

第 章では、論理的思考力が広く話題になっている背景について述べた。本節では、論理的思考にかかわる高校生の現状について、教師がどのような問題意識を持っているかを整理する。あわせて高校生自身が感じている課題についても触れておきたい。

(1) 教師の意識

ア 「国語力向上モデル事業」推進校の報告から

文部科学省は、2003（平成15）年度より「国語力向上モデル事業」を開始した。これは、国語科だけでなく、他教科や「総合的な学習の時間」との関連を図ることを視野に入れたものである。2003年度には22のモデル地域が指定され、その中から192校の国語教育推進校（高等学校は28校）が選定された。2年間の研究を終えた推進校の報告を見ると、読書量や語彙力、コミュニケーションの力と並び、考える力にかかわる言及が少なくない。以下に、各学校の問題意識から関連する箇所を挙げておく³⁾。

- ・ 「読んで理解すること」に関して苦手意識を持っており、国語の嫌いな理由を「考えるのが面倒」と答えている。〔中略〕考えること自体が面倒で、それを拒絶する生徒が増加しているようにも懸念される。(秋田県立角館高等学校)
- ・ 論理的に考えたり文を組み立てたりする力が不足している。また、日常的な教師との会話の中で敬語が正しく使えないなど、基本的な国語表現能力も課題である。(京都府立西宇治高等学校)
- ・ ここ数年、語彙の貧弱さ、論理的思考力・作文能力の低下、コミュニケーション能力の低下などが顕著に見られるようになったが、それは「学ぶ意欲の低下」と連動しており、大量の「勉強しない高校生」を生み出すという悪循環に陥っている。(大阪府立住吉高等学校)
- ・ 生徒の多くが、的確に自己を伝えようとする意欲やそのための技術を持っていない。このことが他教科の学習での行きづまりや人間関係の悩みなどにも大きく影響していると考えられる。(広島県立芦名まなび学園高等学校)
- ・ 生徒に質問しても、間髪入れずに「わかりません」と答えたり「あれこれ考えるより早く答えを言ってほしい」という反応をする生徒が増加しており、結果のみを求める傾向にある。(広島県立可部高等学校)

同様の指摘は、出版社の創拓社が実施した調査(1996)にも見られる。これは、高校教師を対象とした日本語力に関するアンケート調査である。回答校140校の問題意識は次のようにまとめられている。

日本語力の低下による影響の中で特に問題と思われることについては、コミュニケーションの力不足からくる人間関係の希薄化を心配する声が出された。特定の仲間以外と会話ができないため、社会性が育たず孤立化、相手の立場を尊重したり、自己を客観的にとらえることができないことなどを懸念。ひいては考える力の低下、あらゆる教科の理解の低下につながるという意見が目立った⁴⁾。

さらに、その対策として必要と思われること(複数回答)には、「論理的に考える力を養う」を挙げる教師が140校中63校と最も多かったという。以下、「語彙を増やす」(58校)、「書く力を高める」(56校)が続いている。井上尚美氏はこの調査を取り上げ、現在の状況が調査当時とほとんど変わっていないと述べている。続いて「21世紀における日本の国語教育には、論理的な思考能力を育てる指導が強く求められていること、それにもかかわらずその具体策に各校とも苦慮していることが、はっきり見てとれるのである⁵⁾」と指摘していることに注目したい。

イ 研究メンバーのとらえた高校生の現状

続いて、研究メンバーのとらえた高校生の現状を整理しておく。現状分析をする中で、学校生活の様々な場面における高校生の姿が浮かび上がってきた。具体的には以下のようなものである。

- ・ 生徒と接していると、表現が下手だと感じる。自分の思いを順序よく組み立ててわかりやすく話していくということを身につけていない。それで孤立したり、思いをためこんでキレたりしている。
- ・ クラスでの話し合いで、仲間内の考えをクラス全体に提示して説明し、納得してもらおうということがほとんどできない。順序だてて説明することができないし、相手に理解してもらうにはどう言えばいいかという工夫もない。提案を否定されると自分の人格を否定されたように思うところがあり、好き、嫌いの感情の部分と、論理的に述べることとが区別できていないと感じる。
- ・ 自己を伝える技術を持っていない生徒が多いと感じる。生徒指導においても、なぜ問題行動を起こしてしまったのかを説明することができない。高校を続けたいのかどうかを保護者や教員にうまく伝えることができず、学校に戻るタイミングを逸してしまうケースがある。

- ・ 就職の面接試験で、不合格となる生徒が少なくない。準備していったことは話せても、志望動機などを突っ込んで聞かれると、思うことはあっても、的確なことばを探し切れずに沈黙してしまうようである。
- ・ 何かを説明したり、自分の感情を表したりする際に、ひとつのことばでまとめてしまう傾向がある。たとえば、気になることばの一つに「無理」というのがある。できないことだけでなく、したくないことも「無理」と言う。自分で分析すればもっと的確なことばで表せるものが、皆ひとつにまとまっていると感じる。
- ・ 評論の授業で、「よし、理解してやろう」という姿勢が全くない。先生が説明し、黒板に書いてくれることを写せばよいかという感じである。これは、教科書以外の何か、人の思っていること、考えていることを能動的に理解しようとする姿勢がないことに通じているように思う。
- ・ 小論文の指導をしていて感じるが、自分とは異なる意見を念頭に置いて書くという意識があまりない。自分の考えを一方向的に述べがちで、反対意見の人を説得しようという工夫がない。また「AだからB」と述べる際、AがBの根拠として妥当かどうか吟味する力が十分でない。
- ・ 評論の読み取りを苦手とする生徒が多い。言いたいことを述べるために筆者がどのような具体例を用いているか、反論を想定してどのようなことを述べているかということ自分で読み取っていくのが難しい。筆者の工夫を自分が意見文を書く際に取り入れてほしいと思うが、生徒の中では読むことと書くことがつながっていないと感じる。

学習指導に限らず、ホームルーム活動から生徒指導、進路指導に至るまで、学校生活の様々な場面で課題が出された。問題意識の多くは、生徒が自らの思いや考えをどう伝えるかという表現の領域と深くかかわっている。

また、ここでは詳しく触れなかったが、研究メンバーからは語彙についての課題も出された。文化審議会答申では、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」が働くときの基盤を成すものとして、第一に語彙が掲げられている。「人間の思考は言葉を用いる以上、その人間の所有する語彙の範囲を超えられるものではない⁶⁾」と述べられている通り、その重要性は改めて繰り返すまでもない。本研究は語彙力の育成に直接取り組むものではないが、思考力を支えるものとして語彙の問題は念頭に置いておかねばならないだろう。

以上、「国語力向上モデル事業」推進校の報告や研究メンバーの問題意識から、高校生の現状を整理した。教師の多くが高校生の「考える力」に課題があると感じている。特に、コミュニケーションの力とかがわって論理的思考力の必要性を考えている点を確認しておきたい。

(2) 高校生の意識

(1)では教師の意識について述べてきたが、高校生は自身の論理的思考力をどのようにとらえているのであろうか。ここでは、文化庁の調査をもとに高校生の意識を探りたい。

文化庁では、1995年度から「国語に関する世論調査」を実施している。2002年度調査の設問には、日本人の国語力についての課題を問うものがあった。高校生の年代と重なる16歳から19歳の回答では、国語に関して「自信の持てない」のは、男性の場合、割合の高かったものから順に「考えをまとめ文章を構成する能力」(41.8%)、「説明したり発表したりする能力」(40.0%)、「文字や表記の知識」(29.1%)であり、女性は「文字や表記の知識」(38.6%)、「考えをまとめ文章を構成する能力」(36.8%)、「説明したり発表したりする能力」(33.3%)となっている(九つの選択肢より三つまで回答)⁷⁾。

「論理的に考える力」を選択した者はそれぞれ14.5%、19.3%と他に比べて少なかった。しかし、数値が低いからと言って「自信が持てる」とは言い切れない。論理的とはどういうことがイメージできていない、論理的に考えることを求められる場面が少ないといったことも大いに考えられる。逆に、選択する者の多かった「考えをまとめ文章を構成する」ことや「説明したり発表したりする」ことは論理的思考と不

可分のものである。むしろ、論理的思考力とかかわって、より具体的に表現の領域で課題を感じているとも言える。いずれにしても、高校生自身が感じている課題と教師の問題意識とが大きく食い違っていることはなさそうである。

2 教材開発と授業構想

前節では、論理的思考力にかかわる高校生の現状を分析し、問題意識の整理をおこなった。今の高校生は、自らの考えを整理し、相手にわかるように表現する（文章を構成する、説明する）力に課題があると言える。このような力をつけるためには、どのような教材を用い、どのような授業を構想するのが有効であろうか。

論理的思考力の育成と言え、通常考えられるのは、評論・論説による指導である。これらを扱った授業の中で、論理展開に注意して読み、文章構成の型を抽出したり、その型を応用して意見文を書かせたりすることも有効な指導であろう。しかし、一方で生徒の「必要感」から離れた単調な授業になり、学習活動が停滞してしまうとの実践報告もある。そもそも評論・論説には難解なイメージがつきまとい、抵抗を感じる生徒の多いのが現実である。

まずは生徒の興味関心を喚起することが大切である。そこで、本研究では、生徒の表現意欲を刺激し、論理を組み立てていくことの面白さを実感できる教材の開発を目指した。教材の候補を探すにあたっては、1時間で授業が構想できるもの、言語抵抗の大きくないものを条件とした。どの学校でも比較的容易に扱えるようにするためである。以下に、開発した二つの教材を示す。

(1) 【教材1】 山田真哉「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」

ア 教材について

(ア) 教材化のねらい

「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」は、山田真哉のベストセラー『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？ 身近な疑問から始める会計学』の一部である。本書は七つのエピソードから成るが、どれも身近な疑問を提示して読者の興味を喚起し、疑問を解明しながら会計学の基本事項を説明していく構成となっている。符号を多用した口語的な表現は、作文の際の範文になるとは言い難い。しかし、ベストセラーとなるだけあって、会計学と無縁の読者をひきつける面白さ、多くの人を納得させる力を持っている。

教材化した章には、筆者の住む街にある高級フランス料理店が登場する。立地や価格設定から考えて、とても経営が成り立つとは思えない店であり、筆者は「どうして潰れずに商売をつづけることができるのか？」という疑問を提示する。小さな手がかりから謎を解き明かし、「連結経営」の説明につなげていく構成は巧みであり、「謎解き」の面白さとあわせて高校生の興味を十分喚起できる内容である。

教材本文は、謎を解明するヒントを筆者が発見したところまでを採った。この章の前半のみを取り上げる形となるが、情報を整理すること、使える情報を選択し、それを手がかりに謎を解くこと、解いた謎をわかりやすく説明することを通して、論理的思考を刺激することができる。生徒に論理を意識させるのにふさわしい教材であると考えられる。

(イ) 出典

教材本文は、山田真哉『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？ 身近な疑問から始める会計学』（光文社新書 2005年）のエピソード2「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎 - 連結経営 -」によった。指導上の配慮により、筆者の了解を得て一部表記を改めた。また、文中の小見出しのほか、他の章を踏まえて書かれている箇所を省略している。

(ウ) 筆者

山田 真哉（やまだ しんや） 1976（昭和51）年、兵庫県神戸市に生まれる。大阪大学文学部史学科を卒業後、一般企業を経て公認会計士となる。主な著書に『女子大生会計士の事件簿』『女子大生会計

士の事件簿DX』、『世界一やさしい会計の本です』などがある。

(I) 教材本文の要旨

「私」の自宅近くのフランス料理店は、商売の原則を明らかに無視しているのに、潰れることなく何年も続いている。この謎の店に足を運んでみると、トイレの壁にすべての疑問を吹き飛ばす「答え」があった。

(オ) 構成

自宅近くにフランス料理店がある。マンションの1階に入っていて、一見何の店かわからない。値段が高く、客が出入りしている様子もない。しかし、いっこうに潰れる気配がない。〔冒頭～〕

この店の謎を整理すると、立地の謎、価格設定の謎、評判にかかわる謎が挙げられる。どのような客をターゲットとしているのか見えてこない店である。〔P1L22～〕

商売には等価交換という原則がある。この店は、その原則を明らかに無視した商売をしており、何年も続いていることにはかなりの違和感がある。〔P2L9～〕

ある日、「私」は意を決してこの謎の店に足を運んだ。維持費のかかりそうな内装、絶品というほどでもない料理にますます謎を深めてしまった「私」であったが、食事の合間にトイレに立つと、壁にすべての疑問を一瞬で吹き飛ばす「答え」があった。謎はすべて解けた。〔P2L31～〕

イ 授業構想および評価について

高等学校1学年の「国語総合」で1時間(1単位時間50分)の扱いとする。学習の手引きとして、〔一〕このフランス料理店の謎を整理しよう、〔二〕整理した謎を筆者に代わって解いてみようという二つを設定した。

筆者が「謎」と呼んでいるものは、「経営が成り立たないはずだと考える根拠」と言い換えることもできる。その判断の根拠を3点に整理して発表させるのが〔一〕の活動(情報の読み取りと再構成)である。〔二〕は「立地」「価格設定」「評判」という三つの謎の解明(根拠を明確にした論理の組み立て)である。店内の張り紙などからわかることを整理させ、この店の立地や価格に必然性があることを発見させる。示された情報を整理すること、根拠となり得る情報を選択しながら筋道立った説明を試みることにより、「論理」を意識させることがねらいである。

授業時にはワークシートを配布する。生徒に授業の流れを意識させるためである。ただし、正解を書き込むことに終始すると、それ以上考えようとしなくなってしまうおそれがある。あくまでも、自分の考えを整理するためのシートであると説明しておきたい。シート内には、以下に示す評価規準を組み込み、それぞれA～Dの4段階で自己評価させることとした。授業展開の詳細は、後掲(p28)の学習指導案を参照されたい。

<評価規準>

「論理的に考える」ということが意識できる。

筆者の疑問を的確に読み取り、わかりやすく整理することができる。

文中に手がかりを求め、結論を導くことができる。

(2) 【教材2】 辺見庸「マスクメロン」

ア 教材について

(ア) 教材化のねらい

論理的思考力を育成するにあたって、緻密に構成された評論・論説に学ぶところは多い。しかし、文学的な文章が「論理」の指導に不向きかと言えば、決してそうではない。論理的に考える場面は十分設定可能であるし、作品中に根拠を求めながら自らの考えを組み立てていく活動から論理を意識させることができると考える。生徒の興味関心を喚起できるという点でも、文学的な文章を用いることはひとつの有効な手段である。

「マスクメロン」は、「出前家族」という商売を始めた素人劇団員が、ある夫妻の注文を受け、夫妻

の娘とその恋人の役を演じるというストーリーである。夫妻の娘に何があったのか不明なまま話が進行するため、読者には夫妻の言動が謎めいて見える。事の真相が明かされる結末まで、生徒も興味を失うことなく読み進めていくことができるだろう。

「とらタヌ」、「駄目もと」といった省略表現等に見られるやや軽い文体は、高校生の範とはなりにくい。また家族を「出前」するという設定自体に、道徳的に是とされない要素を含んでいる。しかし、この作品が読者に深い思考を迫る、魅力ある小説であることも事実である。生徒たちは、それぞれの意見を交流し合うなかで、「取り替えのきかない家族という存在」について考えさせられるに違いない。家族の問題に限らず、この作品は多様な読みが可能である。教師の用意した「答え」を探すのではなく、生徒たちが主体的に読み、またその読みを人に伝えたいと思うだけの内容がこの作品にはある。根拠を明確にししながら自分の考えを筋道立てて述べる学習に適した教材であると考えられる。

(イ) 出典

「マスクメロン」は、雑誌『Miss家庭画報』（世界文化社）に1991年から翌92年にかけて「食の原風景」として掲載された短編小説20編の中の一つである。教材本文は、『傷んだハートにこんなスチュウを』（世界文化社 1992年）によった。指導上の配慮により、作者の了解を得て一部表記を改めたほか、次の部分に変更を加えた。なお、1時間の授業で扱える長さに調整するため、冒頭の30行を省略し、リード文をつけている。

- ・実在の人物や会社、学校を取り上げている箇所について、削除または別の表現に改めた。
- ・身体的な特徴を否定的にとらえる表現、および学校間の格差を想起させる表現を削除した。

(ウ) 作者

辺見 庸（へんみ よう） 1944（昭和19）年、宮城県石巻市に生まれる。早稲田大学文学部を卒業後、共同通信社に入社。91年『自動起床装置』で第105回芥川賞、94年『もの食う人びと』で講談社ノンフィクション賞を受賞する。主な著書に『ハノイ挽歌』『赤い橋のぬるい水』『反逆する風景』『不安の世紀から』などがある。

(I) 大意

「出前家族」という商売を始めた素人劇団の団長ピーチは、ある中年夫婦から「娘とその恋人に会いたい」と依頼され、クイナと共に夫妻を訪ねる。芝居は夫人によって1時間で打ち切られるが、その帰途、夫妻の娘が3年前に自殺していたことを知らされる。ピーチは「出前家族」を1回限りで終えることに決める。

(オ) 構成

素人劇団「楡」の団長ピーチは、劇団の赤字を解消するため「出前家族」という商売を考え、団員に提案する。団員は「駄目もとでやってもいい」と話に乗る〔冒頭～〕

「出前家族」のチラシを作り、タウン誌に広告を出して1週間後、吉田という中年夫婦から「娘とその恋人に会いたい」という注文が来る。「久しぶりに会ったという感じ」を出してもらえればよいという依頼であった。〔P 1 L32～〕

翌日、ピーチはクイナと共に吉田邸を訪れる。夫妻はクイナの演じる娘・房子に謝罪の言葉を述べ、ピーチの演じる恋人・島田には「君を一生恨むよ。断じて許せない」と言い放つ。〔P 2 L 5～〕

房子の好物であるマスクメロンが運ばれ、4人で食べる。夫妻は「一ミリほどの皮一枚になるまで」メロンを食べる二人の口を、呆然と見つめる。〔P 3 L 38～〕

マスクメロンを食べ終えたときが芝居の終わりであった。1時間で芝居を打ち切った夫人に「ふたり合わせて六万円です」と答えながら、クイナは「自分がなんだか厭に」なる。部屋に漂っていたのが線香のにおいであるらしいことに、そのとき気がつく。〔P 4 L 10～〕

二人は劇団会計係のオサムから、房子が3年前に自殺したこと、島田は吉田夫妻の会社の社員で、会社の金を持ち逃げしたまま行方不明であることを知らされる。甘かったマスクメロンの果汁が喉で灰汁のように変わっていた。黙りこくっていたピーチは「芝居の神様に申し訳ないことをしちまった」と言い、「出前家族」を一回限りで終えることに決める。〔P 4 L 24～〕

イ 授業構想および評価について

高等学校1学年の「国語総合」で1時間(1単位時間50分)の扱いとする。考える時間を十分確保するため、本文の読みは事前に終えておく。授業の始めには、生徒の実情に合わせて、作品の状況設定が理解できているかどうかを確認しておきたい。

学習の手引きとして、〔一〕夫人が芝居を一時間で打ち切ったのはなぜか、根拠を示しつつあなたの考えを述べてみよう、〔二〕ピーチはなぜ「こんな芝居やっちゃいかん」と思ったのか、根拠を示しつつあなたの考えを述べてみようという二つを設定した。多様な読みが可能な作品であることから、一つの正解に導いていくのではなく、生徒の主體的な読みを尊重する授業展開を考えた。生徒は自らの意見をクラスメートにわかるよう筋道を立てて説明する。その際、「ただ何となく」ではなく、根拠を明確にして意見を述べるよう促すこととする。この活動を通して、文学的な文章を読む際にも「論理」が働くこと、皆に納得してもらうためには説得力のある説明が必要であることに気づかせるのがねらいである。同時に、他の意見を聞くことによって、自らの考えを見つめなおし、再構築する姿勢を育てたい。

ワークシートは授業の最後に配布する。「なるほどと思ったこと」や発表できなかった考えを書かせることにより、思考の筋道を確認させるのが目的である。また、シートには、以下に示す評価規準を組み込んだ。発表しなかった生徒の自己評価が低くならないよう配慮しながら1時間の振り返りをさせたい。なお、授業展開の詳細は、後掲(p37)の学習指導案に記した。

< 評価規準 >

感覚的であることと論理的であることの区別ができる。

自分の考えを述べる際、その根拠を作品の中に探し出すことができる。

根拠を交えた自分の意見をわかりやすく整理し、説明することができる。

3 授業実践

本研究では、開発した二つの教材を用いて研究メンバーの各所属校で実際に授業を行った。実践結果をもとに、授業構想や教材そのものの適否を検証するためである。

両教材とも1学年を対象として授業を構想したが、実際には、すべての学年にわたっての実践となった。本節では、各学校における具体的な生徒の反応、授業後の生徒の感想、自己評価の結果などを示し、授業者の考察を述べることとする。なお、各学校の特徴は以下の通りである。

県立桑名工業高等学校

創立1961(昭和36)年、生徒数454名。1年次機械系2クラス、電気系2クラスでスタートし、2年次より生徒の希望に応じて5つのコースに分かれる「くくり募集とコース選択制度」を平成14年度から実施している。また平成16年度より、企業で授業を受ける「日本版デュアルシステム」のパイロット・スクールとして文部科学省から指定を受けている。

県立亀山高等学校

創立1948(昭和23)年、生徒数725名。1学年7クラス(3年生は8クラス)で、普通科・システムメディア科(3年生は情報オフィス科)・総合生活科の3学科から構成されている。地域に根ざした学校づくりをめざし、様々な取組を進めている。

県立津西高等学校

創立1974(昭和49)年、生徒数1160名。1学年11クラス(1年生は9クラス)で、国際科学科、普通科から構成されている単位制高校である。自学・自習・自主・自律の理念のもと、生徒のほとんどが希望している大学等への進学を実現するため、学習指導・進路指導の充実に努めている。

県立久居高等学校

創立1983(昭和58)年、生徒数829名。1学年7クラスで、うち1クラスはスポーツ科学

コース、1クラスは国際コースである。平成9年度より単位制を導入し、100を超える科目を設置しており、生徒はそれぞれ自分にあった時間割を作成している。

(1) 【教材1】「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」の実践

県立桑名工業高等学校

ア 学習指導の実際 対象：1学年「国語総合」

テキストの読みについては、授業前に各自読んでおくよう指示をした。授業の始めに、読んできたことを確認する意味で、ワークシートを用いて「謎」の整理をさせた。そして答えを指名によって発言させた。「立地」と「価格設定」はすぐに生徒から出てきたが、三つ目がなかなか出なかった。「ターゲット」という答えを出す生徒が多い。そこでテキスト1ページ39行目「こうなると、もうまったくターゲットが見えてこない」の「こうなると」とはどうなることかという問いを投げかけた。すると「立地が謎で、価格設定も謎で、しかも評判もまったく聞かない」という三つの謎を出させることができた。

次にワークシートを用いて「謎」を解く手がかりを見つけて発表させた。シェフやソムリエという言葉の高級感をうまく捉えられない生徒もいるようなので、シェフとコックとのイメージの違いを考えさせるようにした。また、「料理教室やワイン教室は、本当に大人気なのか。そもそも大人気ならこのような張り紙は不要ではないか」という意見が出た。「この意見に対して、だれか反対意見はないか」と促したが、互いの意見をアグレッシブに戦わせる授業の場を構築できていないので、しばらく授業が膠着した。そこで、人気があるか否かがわかる情報を張り紙から見つけるように指示をし、指名をして発言させた。「今まで12回もやってきているから人気がある」という意見が多く出された。授業では「本当は人気はないのかもしれない、という意見は、残念ながら想像に過ぎる。ここはやはり張り紙の文面通り、人気があるとして捉えざるを得ない」と結論づけた。

続いて、トイレの張り紙から得られる手がかりばかりではなく、筆者がフランス料理店の店内から得た、張り紙からの手がかりを強力に補足する情報も忘れずに見つけるように指示をして、ソムリエと仲がよい二人組の主婦とおぼしきお客さんは料理教室の生徒である可能性があるということを出させておいた。

さていよいよ謎の解明である。ここまではテキスト内から語句を探したり整理をしたりするという授業展開だったので、生徒たちは机に向かう作業が多くなり、少々元気がなくなっていた。しかしこの「謎解き」になると俄然発言が増した。料理教室のターゲットは主婦であること、ワイン教室は飲酒を伴うので、主婦が徒歩でも行けるこの店の立地条件の良さを彼らは指摘した。料理の高い価格設定と教室との関係について、生徒はわかりにくいのではないかと想像していたが、シェフやソムリエという高級感のある語感に誘われやすい人が多いという一般的な傾向を指摘する意見に引っ張られる形で、この関係も理解できたようだ。

ここまでに出的意見をもとにして結論を書かせたが、やはり「料理教室とワイン教室をやっているから潰れない」というものが多かった。そこで「料理店と教室とがうまく互いを盛り上げるような経営をしているから」という生徒の意見とを比較させて、先に行った謎の解明とどちらが合致しているかを考えさせた。

イ 考察

生徒たちの自己評価を見ると、彼らは論理的に考えることを意識できていると考えられる。謎解きの要素を強調した授業展開であるので、生徒たちはみなでワイワイと考えを出し合いながら正解を求めていくという雰囲気を楽しんでいた。今回のテキストの文体や表現は国語の授業で扱うのにふさわしくないういという面はある。しかし親しみやすい文体で、しかも多くの人々に理解できるように筋道を立てて分かりやすく表現しているので、生徒たちはそれをたどることで論理的に考えるということを楽しく学習

できた。つまり彼らは楽しく論理的思考の一つの方法を学んだと言える。ここから彼らが論理的思考力を高めて行くには、実際に自分の力で論理的に何かを説明できなくてはならない。そして他人の批判に自らの論をさらさなければならぬ。そういう意味で、今回の授業は論理的思考力を高めるために組まれるカリキュラムの一端として捉えるべきである。そしてこの後どのような授業を展開するのかを、授業者の目の前にいる生徒たちの実態に即して考えなければならない。

今回の授業の後、本校の周辺に実在するイタリア料理店を生徒たちに示し、その連結経営について彼らに説明させた。また自分たちの周囲に存在する連結経営の例を発見させて、それを論述させた。これらの授業の中で生徒たちは、ある疑問について、それを解明する手がかりを紡いで自分なりの推論を発見するという楽しみを体験した。そしてこのときの発見を声に出して説明して、他人を納得させる快感も味わった。自分の思いを他人に伝えて説得する術を失いかけている今の生徒たちにとって、今回のような授業は、決して隙間を埋める1時間程度の投げ込みで終わってはならないことを強く感じた。

県立亀山高等学校

ア 学習指導の実際 対象：1学年普通科「国語総合」

教材自体が、自動的に論理的な考え方を導くいわゆる謎解き形式になっているので一読しただけで、生徒が興味関心を持った。その関心をうまく引き出しながら、ワークシートに沿って整理・分析を進めた。〔手引き一〕については、ワークシートが空欄を埋める形式になっており、比較的容易に答えを探し出すことができた。〔手引き二〕の手がかりを探す作業は、こちらが想定していた「ポスター」という単語が文中になく（注1）、結果的に「トイレの張り紙」という答えを提示した。「13期生募集なので長く続いていることがわかる」といった意見がでた。「シェフ」「ソムリエ」に付帯する付加価値については気づくことが出来る生徒があまりなく、誘導する発問が必要となった。「料理を習うんだったらどんな人から習いたい?」「シェフという肩書きはどんなイメージがある?」などと問いかけてみた。また、等価交換の説明には、高級輸入車の価格が高く設定され、本国では売られている安いグレードが日本では販売されていないという例を挙げ、説明してみた。最終的には論理的な思考とは「筋道を立てて説明すること」であることをまとめ、授業の締めとした。おおむね、理解はできていたようで、教材そのものへの新鮮さもあって、生徒の興味関心は得られた。1時間の投げ込みで十分対応できる教材である。

イ 考察

生徒の感想の中に「数学の証明問題みたい」ということばがあり、この教材の性格をある意味象徴していると思われた。また、論理というと難しいイメージがあったが、習ってみると意外に単純明快であると感じた生徒もかなりいた。学力の低い生徒でも理解しやすい手軽さがあったといえよう。ただ逆に、ワークシートを用いて機械的に進めるので、明快な展開はできるが、たゆたう深みがないのも事実である。また、文章そのものが模範的な文体とは言えないので、国語の教材としては難点もある。しかしながら、生徒の感想を見ると、謎解きのおもしろさを堪能できたようで、理解度も比較的高く、自己評価も良好であった。

論理とは何かを手軽に学習するという意味において、有効な教材であった。

県立津西高等学校

ア 学習指導の実際 対象：3学年普通科「国語表現」

まず、教材を配布し、黙読をさせた。本教材は謎解きの形式になっているが、一読した生徒たちからは、「わかった、簡単」という声や「全然わからない」という声がほぼ半分ずつ聞かれた。その後、ワークシートの問いに従い、その空欄を埋める形で授業を進めていった。ただし、生徒ひとりひとりに考えさせ、ワークシートに記入させるという時間は取ることができなかったため、「みんなで一緒に謎を解いていく」という進め方になった。ワークシートの問いについては、特に答えが出ずに困ることもなかったが、謎を解く手がかりになる「トイレの壁のポスター」については、本文中にその言葉がなかったた

め(注2)、「トイレの壁にあったのは何?」と問いかけ、手がかりが「ポスター(あるいは張り紙)」であることを確認した。次に「ポスターからわかること」を整理した。出た意見は「レストランではフランス料理教室とワイン教室を開いている」「第13期生というから、本当に人気がある」だった。また「シェフ」「ソムリエ」の語感を尋ねると、「セレブな感じ」という答えが返ってきて、生徒たちがレストランに「高級」なイメージをもつことができた。それらの意見を確認したあと、謎の解明に取り組んだ。謎 立地については、「教室の受講生を集めるためには住宅地である必要がある」「住宅地の奥様をターゲットにしている」という意見がスムーズに出たし、謎 価格設定については、「高級なレストランの料理やワインについて学べるという優越感を受講生に感じさせる必要がある」、謎 評判を聞かないことについては、「教室の受講生が客として見込めることと、その受講生が口コミで新しい客を連れてくる」と、教室の生徒全員が納得しながら謎を解くことができた。全員が、わいわいと楽しみながら、最後に謎が解けて「ああ、スッキリした」という気持ちになっていたようである。

イ 考察

ベストセラーになっている作品を扱ったことで、生徒の興味・関心を引くことができた。また、文章が謎解きの構成になっているため、生徒は楽しんで取り組み、謎が解けたことで「根拠を見つけて物事の説明ができた」という「論理的」に物事を捉える経験ができたと思う。

ただし、「正解」がほぼ決まっている内容であるため、どうしても生徒の自発的な論理的思考力を養うというよりも、従来ありがちな「教師が用意している答えを生徒が当てる」という授業に陥りやすいとも考えられる。生徒に「自分の力で論理的に考える経験ができた」と実感させるには、時間を取り、生徒ひとりひとりがワークシートを完成させてから取り組むのもよい。しかし、そこで完成させることができなかつた生徒が、負の体験として「論理的に考える」ことを捉えてしまつては、元も子もなくなつてしまうという問題もある。

生徒たちは楽しく有意義に「論理的」に物事を捉える実感を持ちながら授業時間を過ごした。本教材の魅力として理解することができる。

県立久居高等学校

ア 学習指導の実際 対象：2学年「国語理解」(学校設定科目)

3学年「話し言葉の技術」(学校設定科目)

本校の生徒には、感性豊かで文学的な文章の読解は好むが、論理的な文章は苦手意識を持って敬遠してしまう者が多い。HRの討論や議論などでも、リーダーシップを発揮できる生徒が、強引に自分の考えを押しつけるような形で進めてしまう場面も見られるなど、筋道を立てて論理的に話し合うことにも不慣れである。そこで、導入に、生徒会行事の際のクラス討論や、小遣いの値上げや進路希望についての保護者との話し合いなど、身近な例を取り上げ、社会生活において他人を説得するときには、論理的な表現が必要になることを指摘して、ワークシートを配布した。「論理的とはどういうことか」と問いかけると、辞書で意味を調べる生徒もあり、それらもふまえて「論理的」とはどういうことかを授業者が板書して確認し、生徒が学習の目的を意識して授業を受けるよう促した。また、ワークシートについては、自分の考えを整理するために用いること、以後は模範解答を一つ一つ黒板に書くようなことはしないので、自分の言葉で考えを文章にまとめることを注意した。

教材については、話題のベストセラーであり多数の読者を得た文章ではあるが、大学入試の小論文等で範文となるものではない点に簡単に触れて、テキストを配布した。読みについては、指名読みと範読の両方をしたが、考える時間を確保する意味では範読の方が適している。その後は、ワークシートに沿って、個人作業の後、発表という形をとった。ワークシートの2「このフランス料理店の『謎』を整理しよう」の3番目にあたる「評判」がやや出にくいのと、「等価交換」が普段耳慣れない経済用語であるので、時間はかけられないが、この二つが特に授業者の援助や説明が必要な部分である。

ワークシートの3「ポスターからわかること」に入ると、生徒は楽しんで考え始めた。「手がかりをさ

がそう」では、僅かな文言からわかることを引き出す作業に興味深く取り組んでいた。13期生まで続くくらい教室の人気が高いことや、シェフ、ソムリエという語に着目する生徒が多かった。客が教室の受講生のようにと指摘する者もいた。

「手がかりをもとにした謎の解明」は、謎 立地と 評判はわかりやすいが、 のなぜ高いのかが出にくい。考える時間を取って机間指導をしつつ、まず と を発表させた。 については、教室があるから価格設定が高くて経営が成り立つ、と考える生徒に、それなら、安い方がレストランの客も増えていいのではないかと問いかけ、なぜ高いのかについて再度考えさせた。このとき、ポスターの中の、「シェフ」「ソムリエ」の語感に注目させて、同じ料理教室でも、身近な洋食屋のクックさんから教えてもらうのと、高級フランス料理店のシェフから習うのでは、料理教室の魅力はどう違うか、などを比較して考えさせると、レストランの価格設定の高さが高級感を演出し、教室の魅力につながっている点を理解できる生徒が出てきた。生徒がそれに早く気付いた講座、およびここで十分時間を取れた講座では、レストランと教室との連携についての理解が深まった。

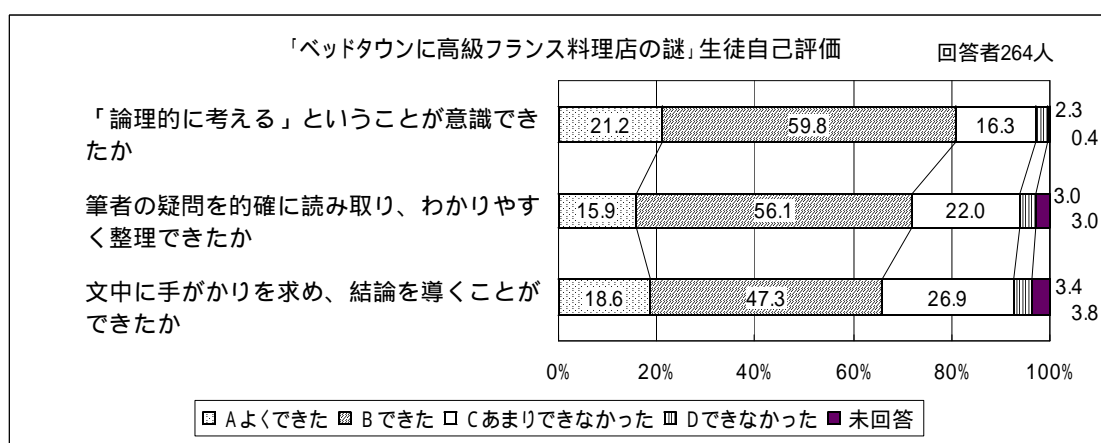
イ 考察

話題の本を教材にした、いつもと違う授業を、生徒はおおむね楽しんでいた。「よく考えてみると分かって、分かったと楽しく解けた」という生徒がいたが、活発な意見交換が行われ、あちこちから「わかった」という声が出るような講座では、自分だけの力では謎解きができなかった生徒も、「スッキリ」感を持って授業を終わることができた。しかし、普段から反応が少なく静かな講座では、「難しかった」という感想が多かった。いつもの授業で感想にそれほど差は出ないので、これは、クラス全体で謎を解いていくという授業の構造の特質によるものと思われる。静かな講座では、席の近い者同士で相談させたり、友人の納得できる意見を紹介させるなど、雰囲気づくりを工夫すると良いと感じた。

「論理的に考えることを、プリントを使いながらすると、とても分かりやすかった」という感想もあった。ワークシートを用いた利点は、まず疑問点を整理し、次に手がかりをもとに一つ一つ疑問点を解明していくという論理的思考の一過程が、わかりやすく生徒に提示できることである。さらに、各自が筋道を立てて考えて出した自分の結論を、シート上にわかりやすく表現する作業ができ、それを発表しあうことで、似た考えでも伝え方が異なるとわかりやすさに差が出ることを実感できた点も効果的であった。

【教材1】の総括

<生徒自己評価>



学校や学年、講座により多少結果が異なる。全体では、「論理的に考えるということが意識できたか」については、81%の生徒が「よくできた」「できた」と回答した。続いて、「筆者の疑問を的確に読み取り、わかりやすく整理できたか」が72%、「文中に手がかりを求め、

結論を導くことができたか」が65.9%であった。逆に「できなかった」と回答した生徒は、から順に2.3%、3.0%、3.4%であった。よりの評価がやや低いのは、謎の解明の後、最終的な結論を導き出すことが難しかったようである。【教材2】に比べると数値は高いが、深く考える生徒ほど自己評価が低いという側面もあることには注意したい。

<総括>

各学校とも、生徒は興味を持って課題に取り組んだ。親しみやすい文体や謎の提示、本文中の情報を頼りに謎を解いていく活動が新鮮であったようである。授業後の感想にも「楽しかった」「謎が解けてすっきりした」というものが多く、概ね好評であった。感想の中には、「論理的に考えるのは難しいと思っていたが、意外にシンプルなものだ気づいた」というものも見られた。生徒の興味関心を喚起し、論理を意識させるという点で一定の成果はあったと考える。

ただ、一つの「正解」にたどり着くためには、ひとつおりの手順を踏まなければならない、時間的な余裕はあまりない。謎の整理の部分は授業者がリードし、論理の構築のための時間をより多く確保する必要がある。また、導き出した解答をどう説明するかという表現の領域にも目を配りたい。生徒自身に筋道を立てて説明させ、どの説明がわかりやすいか、それはなぜかといったことを考えさせる工夫をしていくことが今後の課題である。

(2)【教材2】「マスクメロン」の実践

県立桑名工業高等学校

ア 学習指導の実際 対象：1学年「国語総合」

人の行動、発言、気分には何かしらの理由が必ずあり、その人を取り巻いている状況などから理由を説明することができることの練習を、本時に入る前の1時間で行った。かつて「がぶ飲み コーヒー」のコミーシャルで話題になった「いつもここから(菊池秀規と山田一成)」というお笑いコンビによる『悲しいとき』(扶桑社刊 2001年8月)(注3)の1コマ漫画を生徒に示し、それぞれがなぜ「悲しいとき」につながるのか、を考えさせて発表をさせたのである。

もちろん「いつもここから」が考えた「悲しい」理由(答え)はあるのだが、それを言い当てるのではなく、自分で考えたものを発表し、それを聞いている仲間を納得させることが主眼であると伝えておいた。発表をする者は、自分の意見に対して教室の仲間の反応がいい(「なるほど…」などという納得の声)と満足げに席に戻り、反応が悪いとさらに説明を付け加えて、何とか聞く者を納得させようとしている者もいた。

(ア) テキストの読みについて

次の時間、まず始めに「マスクメロン」のテキストを印刷したプリントを配布した。このテキストを範読するのに短くて15分掛かる。今回の指導案は1時間で組み立てているので、この範読の時間は生徒に自分の意見を表現させるための時間を圧迫するものとなる。そこで生徒に黙読をさせた。時間は8分。ストーリー展開の速さと謎解きの要素という作品の持っている力によって、生徒たちは集中力を保ったまま最後まで読み通していた。

黙読を終えて、ストーリーの確認を行った。「ピーチは女性?」「吉田夫妻の住んでいる家はどんな家?」「吉田夫妻は出前家族をオーダーして何をしたかった?」など、一人ひとりに質問をして確認をさせたのだが、基本的な部分を誤読してしまっている生徒はいなかった。

(イ)〔手引きー〕について

始めに〔手引きー〕について生徒に考えさせ、意見を発表させた。このころになると今までの授業の成果が現れ、指名をしなくても意見を発表する者が多く出てきた。この時点で生徒たちから出されたのは、大きく分けると「ピーチとクイナが本物ではないということに気づいたから」という意見と、「言いたいことを言ったから」という意見の二つである。前者の意見の根拠としては、ピーチとクイ

ナのメロンを食べる様子を掲げ、後者の根拠としては、何回か「それをいいかった」と吉田夫妻が言っていることを掲げていた。しかし、『マスクメロン』という題名から、マスクメロンの食べ方がストーリー展開のポイントになっているはず」というある生徒の意見に、後者の意見を述べた生徒たちは一様に納得をしたようであった。

ここで「吉田夫妻は、ここよりも前に、ピーチとクイナは本物の島田と房子らしくないことを気にしている表現がなかっただろうか」と質問してみた。テキスト2ページ32行目「クイナの腰のあたりに目をやりながら」、2ページ35行目から36行目「爪に垢をためたピーチの手に冷たい視線を走らせた」、3ページ35行目から36行目「吉田夫妻はまったくクイナとピーチの目を見ずに話すのだ」を生徒たちは掲げた。そこで「吉田夫妻はこのようなクイナとピーチとともに、なぜ芝居を続けたのか」と質問をした。しばらく生徒たちが沈黙したので、指名により意見を言わせた。生徒たちからは一様に「房子には謝罪を、島田には恨みをどうにかして言いたかったから」という意見が出された。この時、先に〔手引き一〕に対して「言いたいことを言ったから」という意見を取り下げた生徒が復活してくるか期待したが、そのような発言はなかった。授業の中で出した意見を大切に作る姿勢を作り出せていないという問題を感じざるを得ない。

ここで出た吉田夫妻の思いは果たされたのか、という問いを投げかけたが、すぐに生徒たちから「ダメだった」という意見が返ってきた。理由はやはり、マスクメロンの食べ方があまりにも本物の房子とかけ離れていたから、というものばかりであった。〔手引き一〕の問いに対する生徒たちの意見が、「芝居であっても懸命に自分たちの無念な気持ちをぶつけたいという吉田夫妻は、クイナとピーチが房子と島田を演じきれなかったことで、2時間の予定を1時間短縮した」というところに落ち着いた。

この時点で、授業終了まで残り15分余りとなってしまうていた。この後、「なぜクイナとピーチは演じきれなかったのだろうか」という更なる問いを投げかけようとした。吉田夫妻の思いと、中途半端な気持ちで演じようとしていたクイナとピーチとの差に気づかせることが、〔手引き二〕を考えるヒントになると考えていたからである。しかし、時間の関係から〔手引き二〕の質問に移ることとなった。

(ウ)〔手引き二〕について

発問後、すぐに複数の生徒から、「死者の役を演じてしまい、死者に対して失礼なことをしたから」という意見が出された。理由に、4ページ30行目から31行目「クイナもピーチも喉が苦かった。甘かったマスクメロンの果汁が喉で灰汁のように変わっていた」を掲げ、自殺をした房子のことを聞いた後にこのようになったこと、また35行目「わたし、お化け役やっちゃった」を掲げる生徒ばかりであった。

更に読みを深めさせるために、「死者を演じる芝居は、今までにもたくさんある。それらはすべて、してはならないものなのだろうか」と問いかけた。すると「吉田夫妻や自殺した房子に対して失礼だと思ったから、というのが答えではないか」という意見が出た。そこで「クイナとピーチはどのような芝居をしたのか」と問いを投げかけた。この質問に対する意見は、〔手引き一〕を考えた後なので一様に「下手な芝居」というものであった。続いて「では、彼らは上手に演じていたら『こんな芝居やっちゃいかん』とは言わなただろうか」との質問をしたが、これに対しては「上手に演じていても言っていたかも知れない」というもの以外には出なかった。

授業終了時が近くなってから、ある生徒が「クイナとピーチは、房子の自殺の話を書く前からこの芝居をやってはいけない芝居だと思っていたのだ」と発言した。根拠として、4ページ19行目から21行目「クイナは、精一杯、声に慄然とした調子をだそうとした」を掲げた。そして「金儲けのためにこんな芝居をした自分たちのことを反省して、『やっちゃいかん』と言った」と意見を述べた。ほとんどの生徒がこの意見に納得をした。最後に「芝居をして金を儲けてはいけないのか」と質問したが、2、3人の生徒から「吉田夫妻の、娘に謝罪をしたい気持ちを利用して金儲けをしようとするところがいけない」という意見が出された。

生徒に自己評価をさせ、感想を書かせる時間を確保するためにここで終了とした。

イ 考察

生徒たちの自己評価を見ると、「感覚的であることと論理的であることの区別ができた」と評価している者が40人中28人、「自分の考えを述べる際、その根拠を作品の中に探すことができた」と評価している者が40人中26人という結果であった。また、授業の感想の多くが「注目すべき人やその言動が多くて、難しかった。でも人の意見を参考にして納得できた」「他の人の意見が聞けて、すごく勉強になった。こういう授業はいい」という肯定的なものだった。これらの結果は、文学作品の読解に不慣れな本校の生徒たちが、文学作品を授業で読むことと、読み取ったことをクラスメートに理解してもらえるように説明することの楽しさを感じ取ったと評価できる。

ただ、いくつかの問題点も明らかになっている。生徒たちは今回の授業でも「あらかじめ用意されている正解」を当てようとする姿勢を示し続けるのである。「この部分の文章が根拠だから、自分の意見が正解だろう」と教師に問いかける場面がしばしばあった。同じ教室にいる仲間にも問いかけるよう何度か指摘をしても、このことは改まらなかった。授業者を介してしか意見交換という授業のスタイルが形作られていなかったのである。中には、あたかも正解が存在して、それに誘導するような質問をしてしまう場面があった。たとえば〔手引き二〕の質問に対する「死者の役を演じてしまい、死者に対して失礼なことをしたから」という生徒の意見に、「死者を演じる芝居は、今までにもたくさんある。それらはすべて、してはならないものなのだろうか」と問いかけた。この質問は時間をかければ生徒から出る可能性がある。生徒から出れば、そこから生徒同士の意見交換という場が構築され、論理的に自分の読みを説明することの意味を感じさせることも可能であった。

また、生徒はとかく道徳的な価値観に作品の結末を押し込もうとし、それに囚われることで自分の自由な読みを自制してしまう傾向がある。そこから解放できなかつたことも問題点として挙げたい。生徒の感想に、「楽をして金儲けはできないと感じた」「最後にクイナとピーチが罪悪感を感じたから救われた」というものが多かった。〔手引き二〕の質問に対する意見のひとつとして、吉田夫妻の思いに応じるだけの気持ちを持たずに芝居を演じてしまったクイナとピーチの道義的責任を挙げることはできる。しかし、それを直ちに正解とすることはできない。作品の最後にある「あのひとたちの方が、すごかったなあ……」というクイナの独白に注目をさせるなど、もう少し時間をかけて的確な作品の読みを進めていけば、芝居の質という面からの意見が生徒から出たはずである。

「マスクメロン」は多様な読みを保障する作品である。だからこそ生徒は始めから正確な読解（正解）を求めるのではなく、自分の読みを根拠と共に人に分かりやすく説明をし、また他者の意見にも触れるという思考過程を経て読みを拡げ、そして深めるおもしろさを味わうことができる。そのことは他者の異質性を認め、他者を正当に評価する生徒の力にもなり得る。時間にゆとりのある扱いが求められる。

県立亀山高等学校

ア 学習指導の実際 対象：1学年普通科「国語総合」

1時間の教材ではあるが、前もってストーリーを把握しておかないと、時間が不足する。場面や登場人物の整理は前もって時間を確保しておくことが望ましい。本校の実践においては前の1時間を使って、朗読と場面や登場人物の整理などを念入りにしておいた。

授業の始めは、「人の言動の裏側にはそれぞれ相応の理由があるものだ」という視点に立って、具体例を提示した。たとえば、腕を組んで人と話すときはどんな心理の時かとか、具体的にジェスチャーをしながら、生徒に意見を求めた。次に、今日の授業のテーマは理由探しを本文中からすることであると説明し、手引きに移った。

〔手引き一〕については「房子でないと気づいたから」という答えがまず出た。その理由探しを本文に求めたところ「一ミリほどの皮一枚になるまでメロンを食べる」などの回答があった。また、「飽きたから」という答えも出たが、これに関しては「よく切れる刃物」みたいな性格の夫人だから、手のひらを返したようにクールになれる、という回答があった。また、「気が済んだから」という答えも出た。必要に応じて、教師から考え方を示し、生徒が気づけていない部分については補足した。

〔手引き二〕については、「仏様に悪いから」や「死人を演じてしまったから」などが答えとして出た。その根拠として、マスクメロンの味が「灰汁のように変わっていった」に着目する生徒が多かった。自分たちがまずい芝居を安易にしてしまったことへの後悔については本校の場合生徒からは出てこなかった。

作品そのものが味わい深いこともあって、生徒の興味関心は十分得られたように思う。

イ 考察

登場人物の行動やことばを根拠として読み手の意見を論証していく方法をとったが、理由を本文中に求めるという作業を通じて取り組めば、文学作品でも十分に論理的思考力を養う実践が可能であると実証できた。生徒も、興味関心を示し、自発的に発言する雰囲気も生まれた。1時間の投げ込み教材としては、今回のようにテーマを絞る必要があるが、そういった目的を明確にした読みも意味があると考えられる。ただ、この教材ではできればあと1時間はかけて、「根拠探し」の次のステップへと展開してみたい。深い読みが可能な教材である。

県立津西高等学校

ア 学習指導の実際 対象：3学年普通科「国語表現」

教材は事前に配布し、読んでおくように指示した。授業が始まると、生徒どうして感想を述べ合う姿も見られ、教材に興味を示している様子だった。論理的に考えることについて、先に定義を示すのではなく「体験」させるために、授業開始時にはあえて授業の目標は伝えなかった。ただし、今回の授業については、「正解」を求めるものではないことを伝え、生徒に自由に考える心づもりをさせた。

まず、「相手の目を見ずに話すのはどのような時か」と質問を投げかけ、生徒たちに考えさせた。そして、人間の言動には何らかの理由があることを説明し、同様に教材の登場人物の言動にもそれぞれ理由があるということ意識させた。

〔手引き一〕については、「吉田夫妻が現実に戻り、クイナとピーチが房子と島田ではないと気づいたから」という答えが出た。根拠は本文中の「一ミリほどの皮一枚になるまでメロンを食べる」その食べ方が、社長令嬢である房子の食べ方とはあまりにかけ離れていたから、ということだった。また、吉田夫妻が「今日はそれを言いたかったのです」「今日それをどうしてもいいかった」と言っていることから、「気が済んだから」という意見もあった。さらに、「よく切れる刃物でガラスの表面を鋭く引いたような声」という表現から、「他人であるクイナとピーチに演じてもらっても気がおさまらなかつたから」という意見も出た。生徒が意見を出す際に、本文中から意見の根拠となる部分を示させ、示されない場合には教師側から根拠を示すよう促した。

〔手引き二〕については、『真っ赤な嘘でも結構』『でたとこ勝負』『アドリブ』という安易な気持ちで始めた『出前家族』では、残された家族の真剣な気持ちを受け止めるには荷が重いから」という答えが出た。また、「演劇とは台本をもとに練習して発表するものなのに、何も練習することなくその場を取り繕ったため、後に何も得るものがなかつたから」という答えも出た。いずれも本文中の根拠は、「甘かったマスクメロンの果汁が喉で灰汁のように変わっていた」であった。

最後に、今回の活動のように、自分の意見の根拠として客観的事実(今回は本文に書かれていること)をあげていくことが、論理的な思考であることを確認し、小論文を書く際に大切であることを説明した。

イ 考察

生徒たちは、今回の授業をとおして、論理的とはどういうことなのかを実感できた様子だった。また、同じ教材についての同じ問いに対して、自分の意見とは異なる他の意見が出たこと、さらに、同じ根拠であるにも関わらず別の意見が出たことに面白さを感じていた。文学的文章を教材としたことにより、生徒たちも興味・関心をもって取り組みやすく、解釈の自由度も高いことで自分の意見を形作りやすかつたと考えられる。他の文学的文章においても同様の試みは十分可能であるので、別の機会にも応用したい

と思う。

生徒たちの中には、自分の意見を持ちながらも、思い通りに表現できないもどかしさを感じた者もいた。今後、今回のような経験を重ねることで、徐々に表現できるようにしていくことが必要である。

県立久居高等学校

ア 学習指導の実際 対象：3学年「話し言葉の技術」(学校設定科目)

「マスクメロン」は、2学期期末考査終了後に実施した。この講座では、2学期の後半、論理的に考えることと、分かりやすく説明することを柱として授業を進めてきた。「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」の他にも、佐藤雅彦『プチ哲学』からコーヒーカップの中身当てクイズ(注4)、野矢茂樹『初めて考えるときのように』からサイコロ問題(注5)などを取り上げ、問題について筋道を立てて考え、得た結論を分かりやすく説明する練習を重ねてきた。「論理的に考えるのに慣れてきた」という生徒もいた。今までは正答を求めて考えてきたが、この授業では、意見の可否ではなく、自分の意見の適切な根拠を文中からはっきり示すことができるかどうかを問題にした。「唯一の正解を探すのではなく、自分の意見の根拠をはっきり表現する練習だ」と最初に話したが、感想にも「自分が考えたことが答えになる授業はなるほどと思った」「答えが一つじゃないから自分の意見が言いやすい」などがあり、生徒は発言しやすかったようだ。

40分2限連続授業(期末考査終了後の特別編成授業)だったので、1時間目の始めに教材プリントを配布して、範読した。さらに、手引きに取り組み際には、もう一度テキストをじっくり黙読して内容を理解した上で考えをまとめるよう指示し、時間を十分に取った。板書は横書きとし、向かって左に生徒の意見、その右に根拠を書き出していった。生徒たちが板書を見ながら意見を言うためか、重なる意見が多かった。意見を聞きながらの板書は時間もかかるが、工夫次第で考えを深める有効な手段になるだろう。

〔手引き一〕で出た意見は、ほとんどが「本当の房子ではないと実感したから」というもので、根拠とした本文は、マスクメロンを食べる様子の部分に集中した。「子供の水遊びのようににぎやかな音」「十姉妹の水浴びみたいな音」と、「一ミリほどの皮一枚になるまでメロンを食べるピーチとクイナの口」「魔法の口でも見るようにしばしば呆然と見つめた」の部分の指摘するものが多かった。一人だけ、その前の、「吉田夫妻はまったくクイナとピーチの目を見ずに話すのだ」を挙げ、「それまでは本物の房子でないことはわかっているが、房子のつもりで話していた」と述べた生徒がいた。生徒の感想の中で、その指摘をなるほどなあと考えた、という声が複数あった。また、感想のなかに、「それでも涙があった」から、「話しているうちに房子のことを色々思い出し、辛くなったので、打ち切ることにした」との意見があった。「我に返った」という答えは、感想にはあったが、授業での発言はなかった。

〔手引き二〕では、「こんな芝居とはどんな芝居か」をまず尋ねた。「金儲けのため、いい加減な気持ちでした芝居」で、根拠は「ふたり合わせて六万円です」「ま、でたとこ勝負だな。アドリブもいい勉強だしさ。ピーチは楽観的だった」があがった。「ピーチはどうしてこう思ったのか」については、「死んだ人を演じるのは悪いから」、根拠は、「甘かったマスクメロンの果汁が喉で灰汁のように変わっていた」という意見が多かった。「芝居とはそもそも嘘であり、歴史上の人物を演じていて、本物のその人だと思おう観客はいない。なぜ、死んだ人を演じるのは悪いのか」と問いかけると、挙手して「再会を演じることは出来ない」と答えた生徒がおり、その意見に全体が納得する形でちょうど授業も終わった。感想に、「演劇というものは、演じる人のある程度の個性が許される。だから今回それが許されない状況下での演技は自分たちには無理だと思っていたが、この意見になるほどと思った」というものがあつた。

イ 考察

「どうしてこんな考え方になるのかということを出せても、根拠をうまく出すことができなかった。もう少し根拠を探してから考えてみようと思う」という感想があつた。「マスクメロン」の授業では、意見そのものの可否ではなく、文中のどの表現に意見の根拠があるのか、という観点を中心に授業を進め

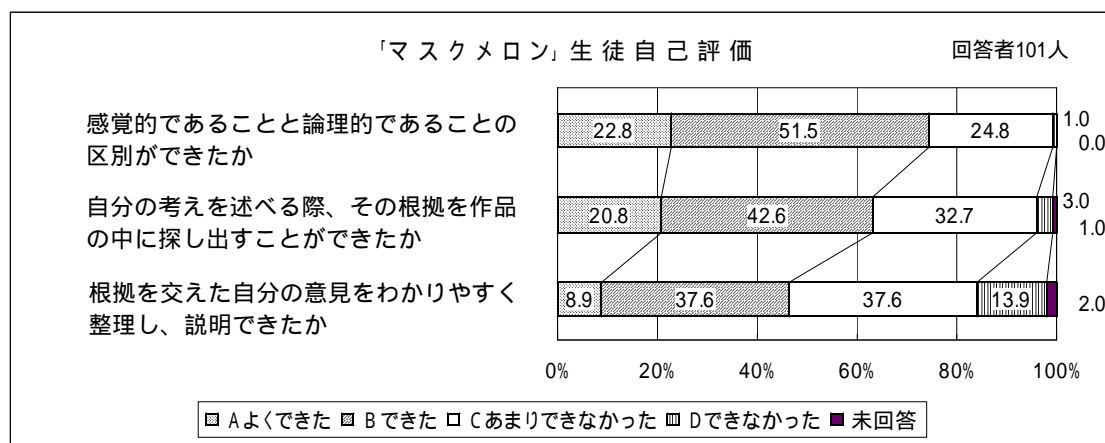
た。学習活動を進める上で、生徒は、自分の意見を他人に伝えるとき、根拠が必要であるということ、また、その根拠はテキストの中に求めるべきである、という二つの点を意識することになる。

本文の中から根拠を探して自分の意見を述べることに重点をおいた授業は、新鮮で、生徒の興味を引いたようだ。本来、文中に根拠を求めて意見を述べることは、国語の授業の基本であるはずだ。しかし、普通の授業では、生徒は、教師が用意している正解を探そうとする。根拠を尋ねても、「全体的に」、「何となく」という答えが返ってくることが多い。教師は、授業の流れの中でそれをさらに掘り下げて、生徒に答えの合理的な根拠を追求するところまではいかず、求めていた答えが得られればよしとしてしまうことがままある。自分の授業を振り返ってみると、国語の基本の部分が出来ていなかったと痛感する。

この「マスクメロン」のような、小説教材で論理的思考力を育成しようという取組は、普通の授業でも活かしやすい。本校の生徒は、難解な評論には苦手意識を持つものが多いが、小説の登場人物に深い共感を覚えたり、描写や情景を味わったりすることは好むので、とりわけ可能性を感じた。長い教材では、根拠探しに時間がかかるが、できれば、定番教材で、今回のような「意見とその根拠」を中心とする授業を工夫したい。その積み重ねが3年生の小論文などに生きてくる、と感じた。

【教材2】の総括

<生徒自己評価>



【教材1】と同様、学校や学年、講座により多少結果は異なる。全体では、「感覚的であることと論理的であることの区別ができたか」については、74.3%の生徒が「よくできた」「できた」と回答した。続いて、「自分の考えを述べる際、その根拠を作品の中に探し出すことができたか」が63.4%、「根拠を交えた自分の意見をわかりやすく整理し、説明できたか」が46.5%であった。逆に「できなかった」と回答した生徒は、から順に1.0%、3.0%、13.9%であった。意見を発表しなかった生徒の自己評価が低くならないよう配慮はしたが、は「説明できたか」と問うたこともあり、「できなかった」と感じた生徒が多かったようである。

<総括>

各学校とも、生徒は積極的に課題に取り組んだ。成果として次の3点を挙げたい。まず、生徒の表現意欲を喚起できたことが挙げられる。作品の魅力と「答えが一つではない」問いによって、教室は自由に意見の言える雰囲気になった。第二は、人にわかってもらうためには根拠をもって話す必要があると気づかせることができた点である。生徒は「何となく意見を言う」と根拠を示すことができない」という場面に遭遇することによって、論理を強く意識したようである。第三は、人の意見を聞くことによって自らの考えを深めさせることができたという点で

ある。同じ意見でも根拠として示す箇所が異なったり、同一箇所を根拠に異なる意見を述べたりといった場面から、生徒たちは多くのことを感じ取り、学んでいた。ワークシートはその学びの様子をつかむのに大いに役立った。

ただ、生徒の意見の中には気になるものもあった。たとえば〔手引き二〕で、「死んだ人の役をやったから（いけない）」という意見が少なからず出た。すでに述べたように、今回の授業はその意見、考え方を否定するものではない。しかし、既成の価値観が本文に即した読みを阻んでいると感じざるを得なかった。今回は根拠を挙げる練習をさせることに目標を絞って授業を展開したが、次のステップとして、作品の的確な読みをどう保障するか、的確な根拠をどう持たせていくかというところを考えていく必要がある。

成果と課題

1 成果 ～研究を通して明らかになったこと～

本研究では、論理的思考力の育成に資する教材とその授業構想について検討を重ねてきた。教材開発をするにあたって、生徒の興味関心を喚起すること、論理を組み立てる面白さを実感させることが重要な課題であった。この点では、両教材とも期待以上の成果が得られたのではないと思われる。生徒の書いたワークシートからは、「論理的とはこういうことか」と実感した様子が伝わってきた。論理を意識させる第一歩になったと考える。

教材は1時間で扱うことを前提に開発した。どの学校でも比較的容易に取り上げられるようにするためである。しかし、授業構想の過程で、すべての学習活動を1時間におさめるのは意外に難しいということに気づいた。多くを盛り込みたくなるのを抑え、できる限りシンプルな授業展開を考えた。その結果、何のための授業なのか、この教材でどのような力をつけたいのかといったことを明確に意識することができた。それはそのまま、生徒が「この1時間で何を学んだのか」を意識できる授業づくりであったと思われる。日頃の授業にその視点を反映させ、常に目標を意識することが重要である。その点を改めて確認できたことも成果と言えるだろう。

以下、それぞれの教材を扱うことで明らかになったことをまとめておく。

【教材1】は、論理的に考えて「正解」を出す性格のものである。根拠となり得る情報を選択して結論を導き出す活動によって、生徒たちは「解ける面白さ」を味わうことができたようである。ゲーム的な要素を持つ教材であるが、ある手がかりをもとに論理を組み立て一つの解答を導き出す、いわば論理パズルを解くような側面が国語の学習にあってもよいと考える。その際、ただ解答を出すだけでなく、導き出した解答をどう説明するかという活動を取り入れたい。どの説明がわかりやすいか、それはなぜかを考えることによって、自らの表現を論理的なものに近づけることができる。そういった、ことばの学習としての位置づけを明確にしておくことが重要である。

また、発展的に、筆者の表現意図や工夫を分析・評価させる活動も検討の価値があるだろう。筆者が何のために謎解きのスタイルでこの章を書いたのか、それにはどのような効果があったのかを考えさせることは、PISA調査が求めている方向とも一致している。書かれている内容そのものから距離を置くこのような活動も、本教材のように親しみやすい平易な文章であれば、生徒は興味を持って取り組むと思われる。こういった観点で教材を開発していくことは、思考力を育成する上で、今後ますます重要になってくるだろう。

【教材2】は、あえて評論・論説を離れ、文学的な文章を教材化したものである。学習の手引きは、多

様な読みが可能な箇所で作成した。教師の用意した答えを探すのではなく、自らの読みを論理的に組み立てる活動をさせたかったためである。生徒たちは、「答えが一つではない」問いによって、根拠を明確にして意見を述べる楽しさを味わい、論理を意識することができたようである。生徒から「今まで小論文が論理的に書けなかった理由がわかった」という感想が出されたことは、それを端的に表している。「論理的思考力の育成 = 評論・論説」と固定的に考える必要はない。文学的な文章を用いた授業も、扱い方や発問の工夫によって論理の指導機会とすることが十分可能である。個々の生徒が自分自身の読みを主体的に構築し、互いの読みを確認する過程でさらに思考を深めていけるという点で、文学的な文章の持つ可能性は大きい。その意味で、新しい教材を発掘するだけでなく、既存の教材を論理という観点から見直していくことも重要であろう。

もう一点、この教材を開発することで「情と理のバランス」ということについて改めて考える機会を得た。論理と感性との間には距離があるようにとらえられがちであるが、決してそうではない。論理を構築するには、その基盤に相手の気持ちを感じ取ったり、経験していないことを推し量ったりする力がなくてはならない。文化審議会答申では、「論理的な思考を適切に展開していくときに、その基盤として大きくかわるのは、その人の情緒力であると考えられる⁸⁾」と述べられている。今回の実践で、「残された家族の思いを受け止めるには、ピーチとクイナでは荷が重すぎた」という意見が生徒から出されたが、これは「感じる力」や「想像する力」に支えられた意見である。コミュニケーションの力とかわって論理的思考力をとらえるとき、この「感じる力」や「想像する力」を同時に育てていくことが大切であるとは言ってもない。論理的思考力のみを取り立てて技術的な面から指導するというよりは、すべてをバランスよく育成することを目指すべきであろう。

2 今後の課題

前節では、両教材の位置づけを改めて確認し、研究の成果をまとめた。すでに述べたように、生徒の興味関心を喚起するという点で両教材は有効であったと考える。しかし、一つの教材、1時間の授業でできることはほんのわずかである。本節では、今後の教材開発や授業構想につなげるべきこととして確認できたことをまとめておきたい。

螺旋的・反復的な指導を工夫すること

目標を明確にした授業を構想することの重要性はすでに述べた。しかし、1回の授業で目指す力が身につくわけではない。生徒の学習段階に応じて繰り返し論理を意識させ、生徒たちが自らの経験に照らして論理を構築できるよう指導を工夫する必要がある。今回の提案教材は、論理を意識させる最初の段階で扱うには有効であった。次の段階でどのような教材をどのように扱うかということは当然考えなくてはならない。他の教材とどう関連を持たせるか、日頃の授業にどうつなげるかを十分考え、検討していく必要がある。

魅力ある教材を探し続けること

今回の実践で、生徒たちは積極的に授業に参加した。これは教材そのものの魅力に負うところも大きかったのではないかと思われる。既存の教材を論理という観点から見直すのと同時に、教材を探す労力も惜しまずにいたいものである。考え甲斐のある課題を提示できる、魅力ある教材を常に探し続けることが必要である。

PISA調査の結果を受けて発表された「読解力向上プログラム」では、「特に授業の中では、なんのためにそのテキストを読むのか、読むことによってどういうことを目指すのかといった目的を明確にした指導が重要である。すなわち、テキストを単に読むだけでなく、考える力と連動した形で読む力を高める取組を進めていくことが重要である⁹⁾」と述べられている。教材を開発する際にも、そのねらいを明確にすることが重要である。同時に、今後は教材開発・教材選定の力がこれまで以上に必要になってくる。国語教師として、その力を常に磨き続けたい。

メディア・リテラシーの考え方を取り入れること

本研究では、1時間で扱うことを前提に教材を検討した。したがって、メディア・リテラシーを意識しながらも、その趣旨に沿った教材を開発するには至らなかった。しかし、論理的思考力の育成をつきつめて考えていくなれば、メディア・リテラシーは避けては通れない分野である。その考え方を取り入れることで、論理的思考力の育成を目指す教材や指導に様々な可能性が見えてくると思われる。

先に挙げた「読解力向上プログラム」では、各学校で求められる改善の具体的な方向が、次のように記されている。

読む力を高めるためには、テキストを肯定的にとらえて理解する（「情報の取り出し」）だけでなく、テキストの内容や筆者の意図などを「解釈」することが必要である。さらに、そのテキストについて、内容、形式や表現、信頼性や客観性、引用や数値の正確性、論理的な思考の確かさなどを「理解・評価」したり、自分の知識や経験と関連づけて建設的に批判したりするような読み（クリティカル・リーディング）を充実することが必要である¹⁰⁾。

これはメディアリテラシーの考え方にも通じるものである。新聞記事やテレビのニュースを始め、グラフや表を含んだ文章、広告、写真やイラストなど様々なものが教材となり得る。視野を広くして、生徒が興味を持てる教材、自らの考えを論理的に展開していけるような教材を探すことに努めたい。

おわりに

本研究は、論理的思考力をどうとらえるのか、論理的思考力にかかわる生徒たちの現状はどうかを考えるとところからスタートした。研究メンバーの問題意識は、コミュニケーションの力とかかわっての論理的思考にあり、その結果、表現の領域と関連を持たせた授業の構想へとつながった。テキストの情報を手がかりに（テキストに根拠を求めながら）論理を構築する授業によって、論理的思考力の育成に多少なりとも資することができたのではないかと考える。次の段階の指導をどうするのかということも含めて、今後さらなる教材開発、教材研究に努めたい。

論理的思考力の育成とかかわってもう一点つけ加えるならば、「表現する中身」の蓄積をどうサポートしていくかということがある。今回、生徒たちはテキストの力によって表現意欲を刺激され、積極的に課題に取り組んだ。しかし、実際に論理的思考を展開していく場合は、テキストの中だけにとどまらない。テキストを離れ、自らの知識や経験に照らして物事を見つめ、判断することを求められたとき、生徒たちは「自分自身の意見」を述べることができるだろうか。

意見を持つためには、ものを考える習慣を身につけるとともに、様々な問題に関心を持ち、知識を蓄えることが必要である。生徒たちの興味関心を喚起しつつ、考える場面を効果的に設定することは、国語科だけでなくすべての教科で取り組むべきことであろう。生徒たちがより広い範囲で論理的に考え、表現していけるよう「話す・聞く、書く、読む」力を育てると同時に、他教科との連携も視野に入れて工夫していく必要があると考える。

最後に、教材開発に取り組むにあたって、早稲田大学教授 町田守弘先生に多くの示唆を与えていただいた。ご多忙のなか幾度も三重にお運びいただき、研究全体にわたって細やかなご指導、ご助言をいただいたことに心から御礼を申し上げます。

【注釈】

- (1) 最初に作成したワークシートでは、「手がかりは()にあり」の()に「ポスター」と記入させるつもりであった。しかし、文中には「食事の合間にトイレに立つと、なんとトイレの壁に、すべての疑問を一瞬で吹き飛ばす『答え』があったのである」とあるだけで、空欄に何と書けばよいのか生徒が戸惑う場面があった。そのため、空欄部分を広げて「トイレの壁の張り紙」と書けるように改訂した経緯がある。なお、ワークシートは p26・p27に改訂後のものを掲載している。
- (2) (1)と同じ
- (3) 平成17年度の三重県総合教育センター研修講座「高校国語科 授業構想の展開 - 効果的な指導過程の構築に向けて - 」(7月27日、28日実施)において、町田守弘先生からご紹介いただいた教材である。
- (4) (3)と同じ。佐藤雅彦『プチ哲学』(マガジンハウス 2000年)。「中身当てクイズ」は教材化され、現行の高等学校国語科教科書『高等学校現代文/新編現代文』(三省堂)に掲載されている。
- (5) 野矢茂樹『初めて考えるときのように』(PHP エディターズ・グループ 2001年)による。第2回課題研究講座(7月4日実施)において町田守弘先生からお示しいただいたものである。

【利用文献】(資料としてp23 - p25およびp31 - p35に掲載)

- ・山田真哉(2005), さおだけ屋はなぜ潰れないのか? 身近な疑問から始める会計学, 光文社, p47 - p54
- ・辺見庸(1992), 傷んだハートにこんなスチュウを, 世界文化社, p25 - p36
いずれも著者の了解を得て、原文に一部変更を加えている。

【引用文献】

- 1)文化審議会答申(2004.2), これからの時代に求められる国語力について, p7
- 2)井上尚美(1998), 思考力育成への方略 - メタ認知・自己学習・言語論理 -, p45, 明治図書出版
- 3)各学校の報告書より(学校または都道府県教育委員会のHP等より)
 - *秋田県立角館高等学校「国語力向上モデル事業 ~『読む』ことの指導法を改善して『書く』ことの力を育てる指導のあり方~, p3
 - *京都府立西宇治高等学校「『意見』を持たせるための指導事例 - 『国語力向上モデル事業』平成15年度中間報告を兼ねて -, p22
 - *大阪府教育委員会 HP <http://www.pref.osaka.jp/kyoishinko/kyomu/kokugoryoku/sumiyoshi.pdf>
 - *広島県教育委員会 HP <http://www.pref.hiroshima.jp/kyouiku/hotline/05junior/1st/17kokugoryoku/torikumi/asinamanabi.pdf>
 - *広島県立可部高等学校 HP <http://www.kabe-h.hiroshima-c.ed.jp/>
- 4)生徒の日本語力 低下, 1997.6.12, 毎日新聞朝刊, 16面
- 5)井上尚美(2005.5), 「論理意識」を持つ, 月刊国語教育, p12, 東京法令出版
- 6) 1)と同じ, p12
- 7)文化庁文化部国語課編(2003), 平成14年度世論調査報告書 日本人の国語力, p25 - p26, 国立印刷局
- 8) 1)と同じ, p12
- 9)文部科学省(2005.12), 「読解力向上プログラム」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/014/005.htm
- 10) 9)と同じ

【参考文献】

- 国立教育政策研究所編(2002), 生きるための知識と技能 OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 2000年調査国際結果報告書, ぎょうせい
- 国立教育政策研究所編(2004), 生きるための知識と技能 2 OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 2003年調査国際結果報告書, ぎょうせい

資 料

「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」テキスト	2 3
ワークシート	2 6
学習指導案	2 8
「マスクメロン」		
テキスト	3 1
ワークシート	3 6
学習指導案	3 7
授業の感想および生徒自己評価	4 0
平成17年度課題研究講座		
「高等学校における国語教材の充実」研究の流れ	4 6
共同研究者	4 8

私の自宅近くにフランス料理のお店がある。

といっても、私の家はなにも繁華街や商店街にあるのではない。都心から電車で一時間、そして駅から歩くこと十分、サラリーマン世帯が中心の、どこにもあるような郊外の住宅地にある。そしてその住宅地のど真ん中に、突如としてフランス料理のお店が現れるのだ。

このお店、いかにもフランス料理店！ といったゴージャスな店構えなどではなく、普通のマンションの一階に入っていて、外装はいたってシンプル。一見なんのお店なのかわからない。近づいてみると、入り口付近にメニューが掲げてあって、ようやく「ああ、フランス料理のお店か」とわかるといった具合だ。

そして、そのメニューを見て驚くのが値段である。「うわ、高い！」と思わず引いてしまうような価格設定だ。最低が一万円のコースで、一万五千円、二万円……とつづくのである。

それで流行っているのかというと、けっしてそういうわけではない。家から近いのでいつもお店の前を通るのだが、お客が出入りしている様子がまるでない。「だいたいようぶかな、潰れないかな」と心配してしまうのだが、いっこうに潰れる気配がない。それどころか、近所の人に聞いたところ、もう四、五年前から営業しているらしいのだ。

a [中略]

最初に謎の整理をしておく。

まず、なぜこんな住宅地にフランス料理のお店があるのか、という立地の謎である。これが、田園調布や白金台といった高級住宅地ならまだしも、わが街は本当にどこにでもある、ただのヘッドタウンなのだ。しかも駅から離れているから、まわりには他になんのお店も見当たらない。商店街どころか、パン屋も八百屋もコンビニもなにもない。民家のなかにポツンと一軒だけ高級フランス料理のお店があるのだ。

さらにいえば、このお店は大きな道路にも面していない。だから、ファミリーレストランやファーストフードのように、車で移動中に立ち寄るといったお店でもない。そもそも駐車場もない。

立地も謎だが、さらに謎なのがその価格設定だ。都心などのフランス料理店に比べて立地が悪いのでそれだけ安く提供しますよ、というのならわかるのだが、そうではなく、値段はあまり変わらない。むしろ、どちらかというが高い。ふたりで行ってワインでも空けたら、軽く数万円は散財してしまうような価格だ。

しかし、どんなに立地が悪かろうと、どんなに値段が高かろうと、美味しくて評判のお店ならばお客は集まるだろう。なにせ、都心から数時間の片田舎にある評判のラーメン屋に大行列ができるご時世である。ただ、そういった評判もまったく聞かない。もちろん、テレビや雑誌に取り上げられたこともなさそうだ。

こうなると、もうまったくターゲットが見えてこない。まわりに会社はないから、

サラリーマンがランチに利用することもないだろうし、そもそも高い（ランチは三千円）のだから手が出ない。だからといって有閑マダムがランチに利用するかといえば、有閑マダムなどこのあたりでは見たためしもない。

家族がディナーに利用するにも高すぎるし、もし、誕生日や記念日といった「特別な日」にフランス料理を食べることになったとしても、この名も知れぬお店は選ばれないだろう。なにしろ、安くなければ便利でもなく、評判もわからないのだ。

商売には原則がある。等価交換という原則だ。

たとえば、百円シヨップで買ったものがすぐに壊れたとしたら、あなたはわざわざお店まで文句をいいに行ったりするだろうか？ おそらく、「百円だからいいや」と思っただけで済むはずだ。

しかし、これが百円ではなく、数万円のものだったらどうだろうか？ 「数万円もしたのになんで!？」と、すぐにお店に駆け込むはずだ。

この「百円だから」「数万円もしたのに」というところに、商売の原則が見え隠れする。つまり、自分が支払うお金に見合う商品を見極めて、私たちはお金を払うということだ。だから、同じように「買ってすぐに壊れた」としても、反応がまるで違ってくる。

この、「同じくらしいの価値があるモノ（現金や商品・サービス）同士を交換する」というあたりまえの原則を無視すると、商売はうまくいかない。

話を戻すと、高級フランス料理店のお客さんも、値段に見合うかどうかの見極めを欠かさない。値段が高い分、よりシビアになる。だから、有名シェフがいるとか、夜景が綺麗だとか、とにかく味が評判だとかいったお店に人気が集まる。

そして、そういったお店はだいたい都心にあるし、そもそも都心までわざわざ食べに行くという行為自体も、イベントとして価値がある。

だから、ベッドタウンにある高級フランス料理のお店は、まるで銀座にある百円シヨップのように、商売の原則を明らかに無視した商売をしているといえる。それなのにそういったお店は何年もつづいていけるとなると、かなりの違和感があるのだ。

ある日、私はついに意を決して、この謎の高級フランス料理店に足を運んでみた。しかもランチではない。ディナーだ。数万円もかけてこの謎解きをするのだと思うと、まったく負けたみたいで悔しかったが、会計士としてこのお店の商売形態は無視できなかったのだ。

店に入ってみると、お客はひとりもいなかった。時間が早いせいだろうかと思いつつ店内を見まわすと、意外にも内装が凝っている。高い天井、ガラス越しのオープンキッチン、ズラリと並ぶワインボトル、そしてゆらりと揺らめくキャンドルの灯り。ピカピカに磨かれた床をコツコツと歩きながら、「これでは維持費もたいへんだ」と他人事ながら不安が募る。

肝心の料理のほうは、全品有機野菜を使用しているとかでたしかに美味しかった。

有閑マダム
時間的にも経済的にも余裕があり、趣味や娯楽などで気ままに暮らす夫人。

会計士
公認会計士。

国家試験に合格して資格をもち、企業の財産目録・貸借対照表・損益計算書など財務書類の監査・証明をすることを職業とする人。

だが、「絶品！ 星三つ！」と人に宣伝してまわるほどでもない。

謎を解明しにきてますます謎を深めてしまった私が、「もしかしてこのお店は趣味でやっているのか!？」と思いはじめた頃、ふたり組のお客さんがやってきた。

横目でチラチラ見ていると、その主婦と思しきふたり組は、なぜかやたらにソムリエと仲がいい。「知り合いかな?」と思いつつ食事の合間にトイレに立つと、なんとトイレの壁に、すべての疑問を一瞬で吹き飛ばす「答え」があったのである。

大人気！ しめきり間近！

ハシエフが教えるフランス料理教室↓

ハソムリエが教えるワイン教室↓

第13期生募集のお知らせ

b 「これだ！ これだったのか!！」

謎はすべて解けた。

学習の手引き

一、傍線部 a について、このフランス料理店の謎を整理しよう。

二、傍線部 b とあるが、筆者はどのように謎を解いたのだろうか。一で整理した謎を筆者に代わって解いてみよう。

筆者紹介

山田 真哉（やまだ しんや）

一九七六年。神戸市の生まれ。公認会計士。著書に『女子大生会計士の事件簿』『女子大生会計士の事件簿DX』『世界一やさしい会計の本です』『コミックス』『公認会計士 萌ちゃん』などがある。本文は、『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』身近な疑問からはじめる会計学』（光文社新書 二〇〇五年刊）によった。なお、筆者の了解を得て、原文に一部変更を加えている。

星⁽³⁾三つ 最高級のランクを表す。世界的に有名な「シェラトン・ホテル・ロックス」の旅行案内書）の表示に

ソム⁽⁴⁾リエ フランス語。ワインに関する専門的知識をもち、レストランなどで客の相談に応じてワインを選ぶ手助けをする給仕人。


フランス料理店の を解く!! ～「論理的」に考えるとは～

1 「論理的」とは…??

.....
.....

2 傍線部 a について～ このフランス料理店の「謎」を整理しよう。

- ①
- ②
- ③

 ①～③（根拠）から導きだされる疑問（結論）


ベッドタウンの高級フランス料理店は、 が見えず、

を無視している。

それなのに （筆者の疑問）

3 傍線部 b 「これだ！ これだったのか！」～「謎」をすべて解いてみよう。

手がかりを探そう

 手がかりは（ ）にあり！

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

手がかりをもとにした謎の解明

謎①は…

謎②は…

謎③は…

結論

よって、

.....
.....
.....

「論理的に考える」ということが意識できたか。

筆者の疑問を的確に読み取り、わかりやすく整理できたか。

文中に手がかりを求め、結論を導くことができたか。

A よくできた B できた C あまりできなかった D できなかった

A	B	C	D
A	B	C	D
A	B	C	D

本日の感想

.....
.....
.....
.....

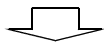
フランス料理店の を解く!! ～「論理的」に考えるととは～

1 「論理的」とは…??

考え方や述べ方などがきちんと順序だち、筋道が認められること。

2 傍線部 a について～ このフランス料理店の「謎」を整理しよう。

- ① 立地
- ② 価格設定
- ③ 評判



①～③（根拠）から導きだされる疑問（結論）


ベッドタウンの高級フランス料理店は、 ターゲット が見えず、

（等価交換という）商売の原則 を無視している。

それなのに 店が潰れないのはなぜなのか （筆者の疑問）

3 傍線部 b 「これだ！ これだったのか！」～「謎」をすべて解いてみよう。

手がかりを探そう

 手がかりは（トイレの壁の張り紙）にあり！

このレストランは教室を経営している。（募集の案内）
 「シェフ」「ソムリエ」から教えてもらえる。（教室の内容）
 教室は評判がよいらしい。（13期生の募集）
 主婦と思しき客は教室の生徒のようだ。（ソムリエと仲のよい客）

手がかりをもとにした謎の解明

謎①は… 教室の方は、住宅地にある方が利用者を見込める。

謎②は… 「シェフ」「ソムリエ」と同様、価格の高さがレストランに「高級感」という価値を持たせ、それが教室の魅力につながっている。

謎③は… レストラン自体の評判は聞かなくても、教室の評判がよければ集客できる。

結論

よって、この店が潰れないのは、フランス料理店経営と教室経営との連携がうまくできているからだと考えられる。

「論理的に考える」ということが意識できたか。

筆者の疑問を的確に読み取り、わかりやすく整理できたか。

文中に手がかりを求め、結論を導くことができたか。

A よくできた B できた C あまりできなかった D できなかった

本日の感想

A	B	C	D

A	B	C	D

A	B	C	D

国語科学習指導案

1 指導対象学年・科目

高等学校 1 学年・「国語総合」

2 本時の指導目標

話題のベストセラーを素材にして、論理的思考に対する問題意識を喚起し、論理的に考えようとする態度を育てる。

フランス料理店にまつわる謎の解明を通して、論理的思考力を高める。

3 使用する教材

山田真哉『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？ 身近な疑問から始める会計学』（光文社新書 2005年）よりエピソード2「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎 - 連結経営 - 」の一部

4 学習の展開（1時間） 1単位時間50分

指 導 目 標	学 習 の 展 開	指 導 上 の 留 意 点
<p>論理的思考に対する問題意識を喚起する。</p>	<p>《導入》</p> <p>1 「論理的」とはどのようなことか確認する。</p> <p>「考え方や述べ方などがきちんと順序だち、筋道が認められること。」</p> <p>2 『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』を素材に、論理的に考える学習をすることを伝えておく。</p>	<p>1 (1)「論理的」とはどのようなことだと思おうか考えさせる。</p> <p>(2)一般的にどのようなことをいうのかを板書する。</p> <p>(3)他人を説得するときや、集団で合意を形成するとき、論理的に考え、論理的に話すことが大切であることに気付かせる。</p> <p>2 この作品の文体は、書いてある内容に親しみを持ちやすくする効果もあるが、作文の際の範文とならないことについては注意する。</p>
<p>構成に注意して読ませる。</p>	<p>《展開》</p> <p>1 音読する。</p> <p>2 ワークシートを用いて「謎」を整理し、発表する。</p> <p>・以下の3点に謎を整理し、発表する。</p> <p style="text-align: center;">立地条件がフランス料理店にふさわしくない。</p>	<p>1 必要に応じてふりがなをつけるよう指示する。</p> <p>2 (1)ワークシートは、正解を書き込むためではなく、自分の考えを整理するために使うよう注意する。</p> <p>(2)生徒の発表を受け、メモ程度に板書する。</p> <p>・ については、出にくいと思われる。生徒の状況に応じて適宜支援する。</p>

	<p>価格設定が高い。 評判もまったく聞かない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ~ から筆者がどのような疑問を提示しているかを確認し、発表する。 	<p>(3) ~ をふまえて導き出される疑問を整理させる。</p> <p>(4) ~ をふまえたうえでなぜ潰れないのかという疑問を提示している点に気付かせる。またそのようにして、読み手にわかりやすくなるよう筆者が工夫していることを指摘する。</p>
<p>根拠を明確にして論理を組み立てさせる。</p>	<p>3 ワークシートを用いて「謎」を解く手がかりを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 張り紙や直前の記述からわかることを考え、以下のような点をまとめる。 <p>このフランス料理店は教室を経営しており、シェフ、ソムリエから教えてもらえる。 「大人気」「第13期」という言葉から、教室の評判はよく受講生も集まっていることが推測される。 先ほど店内で見かけた主婦と思しき客は、ソムリエとの仲のよさからいってこの教室の受講生であることが推測される。</p> <p>4 ワークシートを用いて、2で整理した「謎」がどう解明されるか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ それぞれ以下のような点をまとめる。 <p>教室という性格から考えると、「住宅地」という立地に意味があり、教室の受講生が見込める。 価格設定を高くすることで、フランス料理店が「高級感」という価値を持ち、それが教室の魅力にもつながっている。</p>	<p>3 (1)張り紙や直前の記述を手がかりに、そこからわかることをまとめさせる。 その際、教室を経営していることを指摘するだけで終わることのないよう、2で整理した ~ の謎を解く手がかりとなる情報を張り紙から探すよう指示する。</p> <p>(2)生徒の発表を受け、整理して板書する。</p> <p>4 (1)3でまとめた手がかりをもとに、謎をどう解明したかをまとめさせる。</p> <p>(2)生徒の状況によっては随時、考える手がかりを与える。 この教室のターゲットはどういう人々か。 価格が高いということはこのフランス料理店にどういう価値を与えているか。それは教室にどういう影響を与えているか。 教室の評判がよければ、フランス料理店にどういう影響を与えるか。 ・ 、 については、住宅地ではなく</p>

	<p>フランス料理店の評判は聞かなくても、教室の評判がよければ、教室の受講生がフランス料理店を利用するなど集客につながる。</p> <p>5 手がかりから解明したことをもとに結論を考え、文章にまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まとめたことを発表する。 <p>6 筆者の解明した内容を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の立てた筋道を、筆者の立てた筋道と照らし合わせて確認する。 	<p>違う立地（例えば駅前、湖畔など）だった場合や、価格設定が低い場合を考えさせることで手がかりとすることもできる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ については、張り紙の内容と直接つながらないことから考えにくいと思われる。生徒の状況によっては、次の順で問いかけて考えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> i)シェフ、ソムリエの意味は何か。 ii)シェフとコックの語感の違いは。 iii)シェフやソムリエがいるのはどんな料理店か。 iv)シェフやソムリエから教えてもらえるこの教室の魅力は何か。 <p>(3)生徒の発表を受け、整理して板書する。</p> <p>5 (1)副業で利益を出しているから潰れない、という答えに終わらせず、謎に思われた ~ にも必然性があり、フランス料理店経営と教室経営とがうまく支え合っていることに気付かせる。</p> <p>(2)文中にある手がかりをもとに結論を導き、それを分かりやすく表現することに意識を向けさせる。</p> <p>6 必要に応じて教材の続きを紹介する。</p>
<p>論理的に考えるとはどういうことか、考えさせる。</p>	<p>《まとめ》</p> <p>1 論理的に考えるとはどういうことかを確認しつつ、授業で実施した作業の感想や自己評価をまとめる。</p>	<p>1 他の教材においても論理的に考えることが大事であることに気付かせる。</p>

5 評価規準

「論理的に考える」ということが意識できる。

筆者の疑問を的確に読みとり、わかりやすく整理することができる。

文中に手がかりを求め、結論を導くことができる。

クイナ(二十八歳・女性)と、ピーチ(三十五歳・男性)はいずれも素人劇団「楡」の団員である。ある日、団長でもあるピーチはお金もないのに団員を焼肉屋に誘った。劇団の赤字を解消できるとっておきの秘策があるというのだ。

ピーチのいう秘策とは、「出前家族」だった。ラーメン屋ではない。家族を、つまり人間を、出前するというのだ。ほんとうに。日本全国には「いつか欠けてしまった家族」と死ぬほど会いたがっているひとがうようよいる。会えるなら金に糸目はつけない。最後まで通してくれるなら真つ赤な嘘でも結構。そんな連中だ。主に老人だけだ。

タウン誌に広告をだすか、チラシを配るかする。すると、電話で注文がくる。二十六歳の娘ひとり、出前お願いします。はい、すぐにお届けします。こんな感じ。もともと東京のエンターテイメント業者が始めた新商売だ。「レンタル・ファミリー」なんて名前で、役者ひとり一時間の出前で五万円も取っている。冗談みたいだが、新聞にも写真入りで載るほどの、本当の話なのだ。M舞台の場合は「ファミリー・リース」。まるでサラ金みたいな名前をつけて、ひとり時給四万円ですべてやっている。それでも注文殺到だというのだ。

「暴利だね。それに、横文字名前がいやらしい。われわれはストレートに『出前家族』でいこうよ。時給は三万円がいい。『楡』の八人が一時間やっただけで、二十四万円。二時間で四十八万円。三時間では……」

とらタヌというのだらう。ピーチは始める前から儲けた気でのだった。三分ほど沈黙があった。やがて誰かがいった。元手がほとんどかからないというなら、駄目もとでやってみよう。そう、駄目もとで。皆が乗った。提案を拒否されたときの、齒槽膿漏せきそうのみづの犬みたいに哀しそうな、ピーチの顔つきを見なくなつたからだ。クイナもしぶしぶ乗ることにした。

「親孝行の息子さん、やさしい娘さんと再会したくありませんか。お宅でわたしたちが演じます。……電話一本で、最良の息子さん娘さんを迅速配達！ 劇団『楡』の出前家族で、ハッピー・ファミリー！」

チラシを駅前で配り、スーパールの掲示板に貼り、タウン誌に広告を載せた。が、一週間というものの、なんの反響もなし。四月の初旬になって、やっとS市福祉会館兼劇団仮事務所に電話が一本入った。葉山の吉田という中年夫婦からだった。娘とその恋人に会いたい。娘は、ことし二十五で、房子。恋人は島田という男で、歳がずいぶん離れていて、三十六。いや、なにも難しい注文はございませんのよ。久しぶりに会つたという感じをだしていただければ、私どもはそれでよろしいのです。ええ、二時間、二時間で結構でございます。……そんな電話だった。

きた、きた、きたあ、と叫んで、ピーチはえらく興奮した。房子をクイナが、島田役はピーチ自ら演ずることになった。今後の出前家族の役づくりの参考にしたいから、

5

10

15

20

25

30

35

40

サラ金
サラリーマン
金融の略。会社員・主婦などの個人に貸し金業者が行う、小口の現金貸し出し。無担保・無保証の半面、高金利である。

とらタヌ
確かでないものをあてにして、あれこれ計画をたてること。

というのだ。が、注文主がもともと大きっぱなのか故意なのか、役柄を詳しく指定しないものだから、役づくりもへちまもないのだった。それに出前は電話のきた日の翌日だった。心の準備もない。大丈夫かしら、とクイナが心もとなげに問うた。ま、でたとこ勝負だな。アドリブもいい勉強だしさ。ピーチは樂觀的だった。

翌日、ふたりはバスで葉山に向かい、相模湾を一望できる吉田邸を訪れた。煉瓦の塀の内側にエニシダが黄色の蝶の群れみたいに咲き狂う、映画にでてくるような豪邸だった。ガレージの広さだけで、ピーチのアパートの部屋の三倍はあった。チャイルドを鳴らす。どなた？ どなたなの？ 女、鼻にかかった冷たい声がインターホンから返ってきた。この声、嫌いだ。回転寿司とかファーストフードをばい菌のように軽蔑する声だよ、これは。クイナが小声でいった。馬鹿、脇つてのはそれでいいんだよ。主役はこつちなんだ。ピーチは意に介さない。さあ、始めようぜ。お前からいけ。クイナはピーチに背中を押され、インターホンに向かって最初の台詞を一本調子にいつていた。

「お母様、房子です。いま、帰ってまいりました」

えっ、と息を呑む気配がしてインターホンが絶句した。一、二、三秒後に、様子うかがうような低い声が聞こえてきた。ふ、房ちゃんなの？ 帰ってきたの？ おひとり？ それに男の震える声が重なった。房子なのか？ なに、島田もいっしょなのか。クイナは、声の真剣さに気圧されそうになった。

「そ、そうです。房子です。長いこと、ご迷惑をおかけしました」
クイナは勇を鼓していった。

「こんにちは。し、島田です。お父さん、お母さん、お久しぶりです」
ピーチがフオーロした。

インターホンが切れ、玄関のドアが開き、瘦せて長身の吉田夫妻が鉄の門まで駆けつけてくるのに三分もかかった。夫妻はからだごとぶつかるとしてきて、右と左からクイナの肩を抱きしめた。そうして、う、うと嗚咽した。白髪まじりのふたつの頭がクイナの肩と首を圧迫してくる。クイナは棒杭のように身を硬くした。伽羅だるうか、夫妻の髪が上品な香りを送ってきた。吉田夫妻は、しかし、ピーチ、つまり島田にはなぜか目もくれないのだった。三人の横から、ピーチはただ、どうも、どうも、と意味のない台詞を繰り返していた。

「少しお太りになったかしらねえ。とてもお元気そう。あちらの暮らし向きがよほどよろしいのねえ」

暖炉のある応接間で、クイナの腰のあたりに目をやりながら夫人がいった。主人もうるんだ目で頷いている。なにいつてんの、もともとよ。暮らし向きが悪くたって太るのよ。クイナは腹でそういい、口で、ええ、とても樂をさせていただいておりますので……と応じた。夫妻は依然ピーチには声もかけない。夫人の方が一度、爪に垢をためたピーチの手に冷たい視線を走らせたただけだ。

「お父様、お母様はお元気でいらっしやいましたか？ おふたりとも心なしお瘦せになつたみたいですけど……」

作法の時間に教師にほめられ通しだった某女子高あたりの卒業生みたいな口調で、クイナが訊いた。すると、夫妻はそろってさめざめと泣きだし、泣き声の裏から、夫

心もとない
いかにも頼り
無さそうで、不
安を感じさせる
様子。

意に介さない
気にかけない。

勇を鼓して
勇気をふるい
おこして。

伽羅
沈香（ジンチ
ヨウゲ科の常緑
高木。熱帯地方
に産し、樹脂か
ら香料がとれる）
から取った香料
のうち、特に良
質のもの。

人がとぎれとぎれにいうのだ。あなたが……あちらに行つてから、それはつらくて、つらくて……なにもいいことをしてさしあげられなかったと思うと、つらくて……。

意外な展開だった。クイナが芝居を中断してピーチの顔を窺った。どうすればいいのよ。ピーチは肘で突いて芝居を続行しようクイナに促した。

「房ちゃん、私たち、今日はあなたに謝りたかったの……」

夫人が顔を伏せたままでいった。

「謝らないと、気が済まないのだ……。遅くなったが……」

吉田氏が絞りだすような声でいった。

「い、いえ、もういいのです。済んだことですから。私、こんなに元気になったのですし」

房子というひとにながあつたか知らないが、クイナは明るくいつてみた。

「お父さん、お母さん、いいですよ。どうぞ、ご心配なさらずに。ぼくら、いまうまくやつてるのですから」

ピーチがいわずもがなの台詞をいった。むやみやたらに健康的な声だ。クイナは吹きだしそうになる。ところがそのとき、バケツ一杯のアイスキューブを浴びせかけるような、それは凍りきった声が、夫妻の口からほぼ同時に発せられた。

「君は黙つておれ！」と吉田氏。

「島田様、あなたに、なにかいう資格がおありになりますの？」と夫人。

ピーチはびしょ濡れのノラ犬のような顔になった。なんだ、これは。どちらが役者かわからなくなつてきた。夫妻の方がうまく演じているではないか。ピーチもクイナも、だましているつもりがだまされているような、虚実の輪郭がぼやけた、不思議な気持ちに陥っていた。夫人の、この場合凜としすぎる声が、沈黙を割った。

「房ちゃん、勘当は、私たちの間違いでした。房ちゃん、おわびします。あなたに、今日はそれをいいたかったのです」

夫妻が頭を下げた。

「も、もういいのです。いまは、元気でやってますから」

クイナは必死で応じた。間を置かず、吉田氏の声が響いた。

「島田君、君を一生恨むよ。断じて許せない。君には、今日それをどうしてもいいたかった」

「お、お許してください。どうか……」

ピーチの声はもう虚ろだった。

また沈黙がきた。応接間にも伽羅のような香りが沈んでいた。この部屋では時間がいつか遠い以前から止まり、空気も重く滞っている、とクイナは感じた。夫妻はその澱んだものに馴染み、腐った空気を吸い吐きしながら暮らしている気がしてきた。クイナはさつきからおかしなことに気がついていて、吉田夫妻はまったくクイナとピーチの目を見ずに話すのだ。芝居の常識からまるつきり外れているが、それがかえって不思議な現実感を漂わすのだった。

お手伝いさんがマスクメロンを運んできた。何年ぶりだろう、マスクメロンなんて。クイナは皿の上の、静物画の題材のような形に目を釘づけにした。夫人は静かにいった。

15
いわずもがな
言わないほう
がよい。

「あなたの好物よ。あちらでは毎日めしあがっていらつしやるかもしれませんけれど……」

四人は黙ってマスクメロンを食べ始めた。夫妻はゆっくり、音もたえず、おいしくもまずくもないご飯を食べるときのあたり前の顔で、薄緑の果肉を口に運んだ。クイナの隣では、ピーチが子供の水遊びのようににぎやかな音をたてていた。クイナは気をつかったが、口と舌がどうしても（十姉妹の水浴びみたい）も十姉妹の水浴びみたいな音をだすのだった。気づまりなのに、くやしいほどおいしかった。一ミリほどの皮一枚になるまでメロンを食べるピーチとクイナの口を、夫妻はスプーンを持った手を宙に浮かせて、魔法の口でも見るようにしばしば呆然（ぼうぜん）と見つめた。

マスクメロンを食べ終えたときが芝居の終わりだった。一時間しかたつていない。

夫人が早目に打ち切るようにいった。あちらに帰ったらお元気でね。氷みたいに冷えた目に、それでも涙があった。クイナが最後の台詞をいった。お父様、お母様もお元気で。ピーチとクイナが立ち上がり、夫妻もソファから腰を上げた。すると、それまでその部屋を覆っていた、超次元の透明膜みたいなものが、みもふたもないほどあっさりと消えてしまった。クイナとピーチの貧相な耳が、夫人の声を聞いた。よく切れる刃物でガラスの表面を鋭く引いたような声だった。目に、もう涙はなかった。

「ねっ、おいくら？」

なにを意味するか、クイナにもピーチにも瞬時には理解できないのだった。ねっ、これで、いかほどのなの？ 夫人の聲が追いかけてきた。クイナが我にかえった。クイナは、精一杯、声に慄然（ぶぜん）とした調子をだそうとした。

「ふたり合わせて六万円です」

うつすら卑屈な声になったようで、クイナは自分がなんだか厭（いや）になった。伽羅ではないかと思っていたが、淡い線香のにおいであるらしいのに、そのとき気がついた。

ススキ・ランドリーの社員で、劇団会計係のオサムが、バス停で足をばたばたしながら、ふたりを待っていた。開口一番いうのだった。さっきわかつたんだよ。連絡したくてもできなくてさ。房子つての、三年前のいまごろに自殺してんだよ。薬飲んでさ。新聞にでてたよ。今日は命日かもしんないな。房子さんがつきあっていた島田は、吉田さんの会社の社員で妻子がいたんだね。会社の金持ち逃げして、いまだに行方不明だっというよ。

三人はバスに乗った。クイナもピーチも喉が苦かった。甘かったマスクメロンの果汁が喉で灰汁（あく）のように変わっていた。窓の外で海が銀色に光っていた。黙りこくっていたピーチがやっと口を開いた。

「今夜は劇団全員で厄払いだ。焼肉で、『出前家族』は今日の一回で終わりだ……。こんな芝居やっちゃいかん。……芝居の神様に申し訳ないことをしちまった」

クイナがしみじみ呟（つぶや）いた。わたし、お化け役やっちゃった。負けちゃったよ。芸は実と虚の皮膜の間にありっというけど、あのひとたちの方が、すごかったなあ……。

十姉妹
スズメ目カエ
デチヨウ科の飼
い鳥。全長十二
センチメートル
ほど。

みもふたもない
表現が露骨す
ぎてふくみも情
緒もない。

学習の手引き

- 一、傍線部 a について、夫人が芝居を一時間で打ち切ったのはなぜか。根拠を示しつつあなたの考えを述べてみよう。
- 二、傍線部 b について、ピーチはなぜこう思ったのか。根拠を示しつつあなたの考えを述べてみよう。

5

作者紹介

辺見 庸（へんみ よう）

一九四四年。宮城県の生まれ。『自動起床装置』で芥川賞、『もの食う人びと』で講談社ノンフィクション賞などを受賞。主な著書に『ハノイ挽歌』『赤い橋のぬるい水』『反逆する風景』『不安の世紀から』などがある。本文は、『傷んだハートにこんなスチユウを』（世界文化社 一九九二年刊）によった。

なお、作者の了解を得て、原文に一部変更を加えている。

10

15

「マスクメロン」ワークシート

組 席 名前

◆ 今日の授業でなるほどと思ったことを書いてみよう。

◆ 自己評価

感覚的であることと論理的であることの区別ができたか。

A	B	C	D
---	---	---	---

自分の考えを述べる際、その根拠を作品の中を探し出すことができたか。

A	B	C	D
---	---	---	---

根拠を交えた自分の意見をわかりやすく整理し、説明できたか。

A	B	C	D
---	---	---	---

A よくできた B できた C あまりできなかった D できなかった

◆ 今日の授業の感想

国語科学習指導案

1 指導対象学年・科目

高等学校 1 学年・「国語総合」

2 本時の指導目標

登場人物の言動の理由を作品の中から探すことを通して、論理的な読み取りの力を高める。
自分の意見を、根拠を交えてわかりやすく表現する力を高める。

3 使用する教材

辺見庸『傷んだハートにこんなスチュウを』（世界文化社 1992年）より「マスクメロン」のほぼ全文

4 学習の展開（1時間） 1 単位時間50分

指導目標	学習の展開	指導上の留意点
人の行動や発言には何らかの理由があることに気づかせる。	《導入》 1 日常生活の中の言動には何らかの理由が隠されていることに気づく。	1 例として出す言動は、本文の記述から探し、後の活動につなげる。 「相手の目を見ないで話す」のはどのようなときか、など。
<p>全体の内容を簡単に確認する。作品世界をみなぎ共有できるようにする。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>登場人物の言動の理由を作品の中から探し、自分の言葉でわかりやすく説明させる。</p>	<p>《展開》</p> <p>1 あらすじを確認し、わかりにくい語句があれば確認する。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>2 〔手引きー〕について意見を出し、その根拠が本文中のどこにあるかを説明する。</p>	<p>1 全文の読みは宿題にしておく。あらすじの確認は、本文に表現されている内容のみにとどめ、解釈を含めないように留意する。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>2 出た意見はすべて尊重し、意見の根拠として不適当であると思われるものが出されたとしても、本文中から根拠が指摘されていれば、訂正しない。ただし、感覚的な意見は指摘し、本文の記述を根拠にして意見を述べる場合と、根拠を示すことなく感覚的に述べる場合とでは、説得力が違うことに気づかせる。 「意見」と「根拠」を分けて板書する。</p> <p style="text-align: center;">予想される意見として、「言いたいことを言って気が済んだから」「ピーチとクイナのメロンの食べ方が気に入らなかったか</p>

ら」などが考えられる。個々の意見を尊重しつつも、夫妻が「我に返った」ということは押さえない。

次の表現に注目させて意見を引き出すことも考えられる。

- ・「吉田夫妻は、しかし、ピーチつまり島田にはなぜか目もくれないのだった」(P2L27)
- ・「クイナの腰のあたりに目をやりながら夫人がいった」(P2L32)
- ・「夫人が顔を伏せたままでいった」(P3L6)
- ・「吉田夫妻はまったくクイナとピーチの目を見ずに話すのだ」(P3L35)

「芝居」を打ち切る際の夫人の「涙」の意味を考えさせてもよい。

3 [手引き二]について意見を出し、その根拠が本文中のどこにあるかを説明する。

3 出た意見はすべて尊重し、意見の根拠として不相当であると思われるものが出されたとしても、本文中から根拠が指摘されていれば、訂正しない。ただし、感覚的な意見は指摘し、本文の記述を根拠にして意見を述べる場合と、根拠を示すことなく感覚的に述べる場合とでは、説得力が違うことに気づかせる。

「意見」と「根拠」を分けて板書する。

「『こんな芝居』とはどんな芝居か」と問いかけてもよい。意見が出にくければ、授業者が下の・を提示してもよい。その場合は、どちらかを選ばせ、理由を説明させる。

人間としてやってはいけない芝居

メロンを食べることで地が

		<p>出てしまった拙い芝居</p> <p>意見が出にくい時には、「もし芝居がうまくいっていたら、どうなっていたと思うか」と問いかけてみてもよい。</p>
<p>「論理的」とはどういうことか、考えさせる。</p>	<p>《まとめ》</p> <p>1 「論理的」とはどういうことかを確認する。 「根拠と主張との間に筋道が認められて納得がいくこと。」</p> <p>2 授業の感想や自己評価をまとめる。</p>	<p>1 他人を説得するときや、集団で合意を形成するとき、論理的に考え、論理的に話すことが大切であることに気づかせる。</p> <p>2 「今日の授業でなるほどと思ったことを書いてみよう」の欄に「どの意見(説明)に納得したか」を書かせることにより、生徒の理解度をはかる。</p> <p>発表しなくても独自の意見を持っている生徒がいる。なるほどと思ったことだけでなく、自分独自の意見も書くよう促したい。</p> <p>発表しなかった生徒の自己評価が低くならないよう留意する。文中に根拠を求めながら自分の考えをまとられたかどうかで判断をさせたい。</p>

5 評価

感覚的であることと論理的であることの区別ができる。

自分の考えを述べる際、その根拠を作品の中に探し出すことができる。

根拠を交えた自分の意見をわかりやすく整理し、説明することができる。

授業の感想および生徒自己評価 ~ワークシートより~

【教材1】「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」 ~本日の感想~

- ・ 最初は、なんとなくこういう結論かな? と思うくらいだったけど、しっかり読んでいくうちに根拠がわかってきた。
- ・ 自分だけでは曖昧だった謎解きも、みんなで授業して筋道を立てていって分かった。論理的に考えるって大事ななあと思います。
- ・ 文章の中からは、ほんといっぱいのことがわかる。自分なりの答えをいっばいだすことができた。もっと論理的に説明できるようになっていきたい。
- ・ 謎の部分はわかりやすかったけど、結論になかなか至らず、あまり理解できていない気がする。
- ・ 読んだだけでは全く謎が解けなかった。しかし、みんなの意見を聞いたり、自分で謎をつきつめていくことで謎が解決した。ただ読んでいるだけでは結論は出ないが、論理的に考えることによって結論が出るのがわかった。
- ・ このレストランは経営がうまいなあと思った。レストランってまずおいしくないダメだし、前菜からデザートまでの流れが遅すぎず早すぎずのペースで料理を出さないといけないし、「ここは値段のわりにあんまり」とか、いろいろクレームをつけられるからシビアな世界だと思う。
- ・ わかりやすかった。最後に謎が一気に解決されて読んでいて気持ちよかったです。
- ・ 一回読んだときには「等価交換原則がなりたっている」までの原則は分からなかったけど、授業を進めていくうちにだんだん分かってきた。こうやってだんだん謎がとけていくのは面白いなあと思った。でも私の論理的考えはまだ不足だった。
- ・ すごく納得できたし、おもしろいなと思った。一見謎ばかりなことでも、裏をかえせばちゃんと理由も結論もあるんだと思った。
- ・ 前回(「マスクメロン」)に比べ理解の速度が上がったのを感じた! 「論理的」ときくと難しいように感じるが、ある意味物事を考える上で一番大切なことなのかもしれない、とふと感じました。経済の勉強にもなったかな。
- ・ おもしろかったです。話をもとに考えるのが楽しいです。
- ・ プリントの話がおもしろかったし、論理的に考えるということが勉強できた。最初は「謎」が全然わからなかったけど、授業に沿って考えていくとわかってきた。
- ・ 最初に読んだときはあんまりわからなかったけど、だんだんわかってきた。
- ・ 知らない人が見たら不思議なことにも、知っている人から見れば必ず好都合な条件が隠されていることがあると学んだ。商売には、インパクトが必要だと思った。
- ・ うん、なるほど、というかんじでした。二回くらい読まなきゃ結論にたどりつけなかったです。奥が深いですね。
- ・ もっとすごい謎の真相があるのかと思ったけど、すべての謎にちゃんとした店の意図があって、なるほどと思った。
- ・ 一回読んだだけではあまりよく分からなかったが、よく読み、一つずつ整理していくことによって、論理的に考えることができた。整理し考えることの大切さに気付いた。
- ・ 謎を一つ一つ解いていくことはとてもおもしろかった。こういうことは苦手だったけど、やってみるととても楽しかった。
- ・ いつも以上に頭を使った気がする。つかれた。プリントの結論までやっていたら、あっという間に時間が過ぎていった。こういう授業も頭をよく使わないと問題に答えられないので、これからもやっていってもいいと思う。
- ・ 文章から疑問を読み取り、結論を導くというのは、思ったよりもむずかしかったです。でも結論が出て疑問に思っていたことがスッキリしました。
- ・ 本文からいろんなことを読み取るのが難しかった!
- ・ 謎を追求していくことで結論を導き出すことは、専門家になったようでとてもおもしろいと思った。
- ・ 論理的に考えるのが好きなので楽しかった。こればっかでもいいです。
- ・ 「論理的」というのはとてもムズカシイと思った。ポイントを見つける力やまとめる力があるんだと

分かった。むずかしかった。

- ・ 手がかりを探すのがとてもむずかしかった。でも「論理的に考える」という意味を少し理解することができたと思う。これからもこういったことをやってみたいと思った。
- ・ なんかとても頭を使い、とてもむずかしかったです。でも内容はとても興味を持って、そういう意味ではとても積極的にとりくむことができました。むずかしかったけど「謎」がとけた時はなんかスッキリしました。
- ・ 言葉にするのが難しかった。読み取るのも大変だった。人のを聞いていて、いろんなまとめ方があったと感じました。
- ・ あまり「論理的に…」と考えすぎてしまうと何も浮かんでこなかった。自分なりのわかりやすい説明をまず試してみることが大切なんだと思った。人に説明してわかってもらうのはとても難しいことだなあと改めて実感しました。
- ・ 論理的に考えるということがいまいよくわからなかった。でもお話はおもしろくてよかったです。
- ・ 論理的に物事を考えるということは、とても難しかった。でも、こうして物事を論理的に考えることで、小論文も書きやすくなると思った。論理的に考えるくせをつけたい。
- ・ 胸のつかえがとれるとはこういう時だなあと感心してしまいました。よく、ここのお店はどうやって経営が成り立っているのかしら？ と思うお店があるので、こういう裏付け、謎解きの為に踏み入れるのもとても良い事だと思いました。謎が解けてスッキリしました。
- ・ 論理的に考える難しさを実感した。論理的に考えると色々な面が見えてくるような気がする。
- ・ 論理的に考えるというのが少し意識できて理解できた。これから大人になっていくにつれて、今までの考え方も大切だと思うけど、論理的に考えることの方が必要になってくると思うので、今日の授業は将来的にもよかったと思った。
- ・ 最初は論理って難しい言葉だと思っていたけど、やってみたら普通に人が考えることなんだなと思った。
- ・ 結論を導くのがおもしろかった。よく考えたら身近に答えがあった。
- ・ 論理的に整理するのは難しかったけど、けっこう楽しかったです。
- ・ よく考えると分かって、分かると楽しく解けた。
- ・ おもしろい話だった。続きが読みたいと思った。
- ・ まだいまい論理的という意味は分かってないけど、今日の話はおもしろかった。
- ・ 今日はいつもの授業と違って、今話題の本を使っていてすごく楽しかったです。この本は前から気になっていたのでもっと読みたくなりました。
- ・ ちゃんと価値のある教室が見極めなければならぬのだと思った。
- ・ 論理的に考えると答えが導きやすかった。
- ・ なかなか論理的に考えるというのは、「奥が深くて難しいなあ」と思いました。
- ・ けっこう難しい。推理みたいなのは苦手です。
- ・ 一つのポスターにいろんなことがかくされていて楽しかった。
- ・ 謎があってそれを解くのに集中していたから充実した時間が過ごせた。
- ・ ワークシートを書きながら一つずつ手がかりを見つけていき、だんだんと理解できてきてうれしかった。

【教材1】「ベッドタウンに高級フランス料理店の謎」 生徒自己評価（264人）

A よくできた B できた C あまりできなかった D できなかった

	A	B	C	D	未回答
「論理的に考える」ということが意識できたか。	56人 (21.2%)	158人 (59.8%)	43人 (16.3%)	6人 (2.3%)	1人 (0.4%)
筆者の疑問を的確に読み取り、わかりやすく整理できたか。	42人 (15.9%)	148人 (56.1%)	58人 (22.0%)	8人 (3.0%)	8人 (3.0%)
文中に手がかりを求め、結論を導くことができたか。	49人 (18.6%)	125人 (47.3%)	71人 (26.9%)	9人 (3.4%)	10人 (3.8%)

のみ答えて ・ が未記入の生徒が若干名いたため、途中で自己評価欄に改訂を加えた。

【教材2】「マスクメロン」 ～今日の授業でなるほどと思ったことを書いてみよう～

<自分の考え・発表しなかった意見>

- ・ 「マスクメロン」がキーワードだということをみんなが押さえていた。自分の考えていたことはだいたい黒板に書いてあった。私が言いかけたのは自分の想像で、房子の霊が両親には見えていたのではないかなと思ったけど、本文に書いてなかったから言わなかった。
- ・ 吉田夫妻の涙も演技だった。吉田夫妻がピーチとクイナの目を見てないから。目を見てないのは、どこか冷めてたからで、クイナと会えて喜んだりしたのも、本気じゃなくて、最初から最後まで現実を見てた。メロンを食べてるのを見て、こんなもんかって、気が済んだというより、こんな演技しかできないのかって感じ。だから夫人はあっさりできて、「よく切れる刃物でガラスの表面を鋭く引いたような声」で「涙もなかった」。ピーチが最後にあんなことを言ったのは、罪悪感っていうより、演技をしてみて自分が辛かったんだと思う。亡くなった人の役って聞いてよけい...。「ガラスの表面を鋭く引いたような声」とか「喉が苦かった」とかで分かる。あー、でも上手く説明できないです。雰囲気喋ってしまう。
- ・ なぜ1時間で打ち切ったのか考えた時、幽霊はメロンを食べられないからだと思いました。演技をする中でクイナたちが自分は幽霊の役だと気づくべきだった。夫妻はもうこれ以上続けてもこの二人は演じきれないと思ったんだと思う。試してただけ？
- ・ 傍線部 a について、「クイナとピーチの目を見ずに話すのだ」というところを根拠にした意見になるほど！と思った。
- ・ 一つの物語でも、それぞれの想像力によってかわるんだなと思ってビックリした。ぼくが思ったのは、1時間で終わったのは、房子にあやまりたくて、そして最後に大好きなメロンを食べさせてあげたかったからで、だから食べ終わった瞬間に老夫婦たちの目的は果たされたんだと思う。
- ・ 「虚」だとわかって頼んだことだけど、それでも会って話しているうちに、ピーチとクイナが本物ではないことを実感した。けれど、話しているうちに房子のことを色々思い出し、つらくなったので、打ち切ることにしたのだと思う。
- ・ 「その人」を演じる事はとても難しくてまねできない。その演技で逆に「その人」に関連する人を傷つけてしまう事になるかもしれない。だから、後味が悪く感じてしまって、これからはしてはいけないと思ったのだと思う。
- ・ bの質問で「こんな芝居やっちゃいかん」と言うのは、私は「房子さんが亡くなっているから」に限らず、この「仕事」自体「やっちゃいかん」のだと思う。そう思っていたら（同意見を）言ってくれた人がいた。
- ・ 最初はただ金儲けのためにやっていたけど、演じてみて、亡くなった人を演じることはとてもつらいということに気づいたと思う。
- ・ いくらその房子って人のことを知らないからといって、自分の考えで明るくふるまったりした事はいけないから、こんな芝居やってはいけないと思ったんだと思う。やっぱり、そういう出前家族とかはダメだと思う。
- ・ 初めはお金儲けのためだけで、軽い気持ちで始めた仕事だった。だけど、手引き1のように虚で再会を演じたりするのは良くないとわかった。しかも「甘かったマスクメロンの果汁が喉で灰汁のように変わっていた」とか、「お化け役やっちゃった」のように死んだ人を演じてまで再会をすることが、その夫妻のためになるわけでもないし、ましてやアドリブなんかでどうにかなる問題でもなかった。「役柄を詳しく指定しない」のように事情も分からないのにすることではないし、お互いに演じる方も頼んだ方も結果的に良い気分が終われたわけではなかったから、本当に続けても良い仕事ではないと思ったから。
- ・ 死んだ人を演技しても、やっぱり我に返ってしまって、再会するというのは表現できない。劇団の赤字を解消するために軽はずみな気持ちでしたけど、あまりにも重い役だったと思った。

<他の意見に対して>

- ・ 学習の手引き1で、メロンの食べ方からきているということがわかったときに、なるほどと思った。
- ・ 夫人が二人の目を見ないこと 相手(二人)と心を交わすつもりはない
- ・ 一番最初に出た意見で、クイナとピーチのメロンの食べ方を見て現実に戻ったという説明がなるほどと思った。でも、違う意見で気が済んでないと言っていたのもまたなるほどと思った。「こんな芝居」の説明

では、残された家族には別人の芝居ではダメだという意見もなるほどと思った。一人の人が言う意見でも、自分が考えたことと一緒にのりもあれば、違うところもあった。論理的に意見を言うと、筋が通っている感じがして、納得してしまった。同じような意見でも感覚的に言うと、受ける感じがまた違うのではないかと思った。

- ・ 傍線部bでピーチが言っていたことについて、私は「演劇というものは演じる人のある程度の個性が許される。だから今回それが許されない状況下での演技は自分たちには無理だ」ということだと思っていた。けれど、「再会を演じることはできない」という意見をきいて、「なるほど、そうだなあ」と思った。
- ・ 傍線部bで芝居の面から考えている人がいて、こういう考え方もあるんだなと思った。
- ・ 自分はメロンのくだりはあまり重視していなかったけど、題名になっているだけあって重要なものだと気付いた。最後まで読んでからもう一回読み返すと、「あちら」というのは「あの世」だということに気付いてちょっと怖くなった。そのことも二人の心を重くさせたのだと思う。
- ・ 「マスクメロン」という題名から、メロンからいろいろな気持ちを察したりできたことがなるほどと思いました。あと、人によってのいろいろな考え方に「なるほど」と思いました。
- ・ 演じる人の気持ちと再会したいと思う気持ちは同じにはなれないというところなるほどと思った。

<その他>

- ・ 最後に先生がこの授業のまとめを言ってくださったときに、論理的に説明することのすごさってというか、いかに相手を納得させられるかがわかった。今まで...というか、普段いつも感情的な自分にとっては、まさに「なるほど」だった。
- ・ 最後の先生の話聞いて、発表していることは、主観的に述べているのだけどそれは客観的な見方に基づいているのだということが、なるほどと思った。
- ・ 作品の中の登場人物の一つ一つの動作に意味があって、いろいろな気持ちを本文から読みとれることがわかった。
- ・ 学習の手引きの設問に対する皆の答えが、似ているようで違っていたことで、答えた人それぞれの言いたいことが納得できた。文章の中から設問の根拠を探し出し考えを述べるのが論理的思考というのを納得できた。
- ・ 根拠というものはこの小説の中に必ず答えがあるとわかった。根拠はその人自身になりきって考えてみないとよく理解することはできないということを知った。ただ単に自分の意見を述べるものではないこともわかった。
- ・ 小説を読む時に「ここでこう思ったのは多分こうだから」と簡単にしか考えてなかったから、深く読んでいっているんな人物の心とか読んでいくと更に面白くなるというのが分かった。
- ・ ただ読むだけでなく、登場人物がなぜこう思ったのかとか、なぜこう行動したのかとかの理由と根拠を探してみたりするのもいいということ。
- ・ セリフ一つ一つに、どうしてそんなことを言ったのか理由があるのだと知った。
- ・ 「自分の娘じゃない」というのは少し考えていたけど、どうも理由が見つけれなかった。理由ってというのは意外な所に隠れてて驚いた。
- ・ ただ読むだけでは何とも思わないようなちょっとした表現も、根拠を考えて一つ一つ読んでいけば必ずそれに意味があること。
- ・ 答えがなく、自分で考えたことが答えになる授業は、なるほどと思った。

【教材2】「マスクメロン」 ~今日の授業の感想~

- ・ こういう授業は楽しくて好きです。けど、めちゃくちゃ疲れます。自分から発信しなければならないし、人の発信したのを、広く扉を開けて全部受け止めて自分の中で組み直して理解するっていうプロセスは、かなり頭を使うみたいです。
- ・ 自分の考えをまとめて言葉にするのは難しい。説明をわかりやすくまとめることができないのと、自信のなさで発言できなかったのが悔しかった。すごく頭を使うし、人に理解してもらえそうな内容じゃないと発言する意味がないから、頭の回転が軽快でなければいけないと思った。こういう場で自分の意見をはっきり言える人が、社会や生活の中でしっかりとした行動ができる人なんだろうと痛感した。こんな気の弱い自分の将来が不安になった。

- ・ 小学校の時の国語の授業を思い出した。中学や高校では先生の板書をノートに写して勉強するというスタイルが主だから新鮮だった。小学校のころはクラスでみんなで机をむかいあわせてすごい激論してて、その時の方が自分の考えをそのまま言葉にできていた。今はいい意味でか悪い意味でいろいろ考えるから、自分の意見を素直に言えなくなった。
- ・ もっと自分の意見を的確に発言できるようになりたいと思った。発言は考える時間が少ないから苦手だ。
- ・ みんないろんな見方をしているんだなと思った。自分では思いつかなかった意見が聞けてよかったと思いました。なんか、この話の「出前家族」という発想がおもしろいと思いました。
- ・ みんなの意見を聞いて、人の考え方の違いがわかっておもしろかった。意見を発表する時、なかなか言葉が見つからなくて迷った。
- ・ 今まで書いてきた小論文で、なかなか論理的に書けなかった理由がわかった。文章の中の部分を引き出してそれをもとに説明することで、説得力のある説明ができるんだと思った。だから、みんな言っていることが的確で、「そうとも言える」って思えた。文章の中から、しかも同じ部分の文を読んでも、さまざまな考えで相手を納得させることができるんだなと思った。
- ・ 論理的に話すという授業は今までしたことがなかったから、ちょっとおもしろいと思った。論理的に話すことを身につけるのは難しいと思うけど、普通の生活の場で使っても役立ちそうだなと思った。
- ・ 論理的ってそういうことか！ と思いました。私は全然できてないなって思った。まず、自分の意見をまとめるのに時間がかかるし…。時間をかけて出した答えも、けっこう感覚的だったんだなって思った。だから、すごく難しい。でも、そうやって「伝える」ことは大事だと思う。だから、これから意見を言うときとか、なんかいろいろ思ったこととかを論理的に考えてみて、整理してみたり、人に説明してみたり、たまには気をつけてやってみようと思いました。
- ・ 今日は自分と違う意見が聞けてよかった。自分と同じ所に目をつけていたけれど、そこから思うことが全く違っていたので、そういう考えもあるのかと思った。論理的な思考とは、こういうことなのかと思った。小論文を書く上でとても参考になる授業だった。
- ・ 今日は、論理的に自分の意見を言えませんでした。みんなの意見をきいて、それぞれ違った感じがあるんだなあ、と再確認できました。私は意見をまとめるのが下手です。だから説明するのが大変下手です。
- ・ 今日の授業で論理的の意味がわかった。それと同時に、自分はいつも意見を言う時、友だちに話をする時、つねに論理的だと思った。「だって、じゃん」って言うことが多いし…。
- ・ 答えを出さなくてもいいというのは気楽でよかった。
- ・ 論理的に話せて、とても意義がありました。自分が論理的な人物もやっていける！ とわかったので、ちょっと自信ができました（笑）。人の意見を聞いて、受け止め方の多様性を発見できて、とてもいいと思いました。
- ・ 面白かった。もう一度やってみてほしいと思う。感覚的と論理的思考の違いがよくわかった。
- ・ 登場人物の動作にも一つ一つその場の気持ちがあることがわかった。今までは、なにも深く考えずに読んでいっていたけど、これからはもう少し深く考えながら読んでみたいと思った。
- ・ 理由を考えることが難しいと思った。
- ・ 自分で分かっていた問題が一つあったのに、どう説明したらいいのかわからなくて答えることができなかった。根拠というものがみつからないと、なんかモヤッとした気分になる。もっと理解すべきだった。でも、いろんな事が知れた。答えは問いかけている近くにあるということがわかった。
- ・ う～ん、話はすごく楽しかったけど、根拠を整理して説明するのは難しかった。自分もまだまだだなと感じた。
- ・ 本文の中から根拠を探し出すということは、おもしろいことだった。
- ・ いろいろと根拠を述べて考えるのはおもしろいと思った。
- ・ どんな言葉にも根拠があり、それを見つけ出すのがものすごく大変だった。感覚的に思うことは簡単だけど、論理的に考えることは大変で、疲れてきました。でも、論理的に考えることも少しは楽しくなった。
- ・ こういう小説を読んで論理的に話すことは難しいけど、とても良い体験ができました。
- ・ 本当にこんな商売があるのかと思うとイヤだった。
- ・ いつも感覚的に授業で意見をしていたので、論理的と言われるとなんか難しく考えてしまう。
- ・ 根拠を見つけるのが難しかった。見つけたらなんかすっきりした。出前家族はやるのはいいけど、あま

りすっきりしなくて悲しいことだと思った。

- ・ 小説は意外と奥が深いのに驚いた。いつも上辺で考えてじっくり理解していなかったと思う。もっとじっくり考える力を蓄えないといけないなあと気づかされた。
- ・ 普通の授業では前回や今回のように時間をかけて論理的に見るっていうことはほとんどないから、こういう授業があって良かったと思う。
- ・ 理由を本文から抜き出すのは難しかった。書いてあるのになかなか見つけることができなかった。
- ・ ちょっと難しかった。最初読んだ時は意味がわからなかったけど、授業をしていくうちに理解していった。1時間3万円だけど、こんな仕事はしたくないと思った。私は、こういう授業が苦手ってちょっとわかった気がしました(笑)
- ・ 「再会を演じることはできない」という意見にすごく納得した。ましてやそれを興味本位やお金儲けのためにやることではないと思う。それぞれの家の本当の事情も知らないのに、演じて解決できる問題ではない。本当の親切でやるんだったらお金だって一人3万円も取らないと思う。よく番組とかで、家族の再会とかの企画とかあるけど、この話のように別人がその人になりきって会うというのは、絶対に無理だと思った。こういうことが現実にもあるとしたら、それが本当に正しいとは思えないから、なかったらいいのになと思う。
- ・ 授業としては新鮮な感じの小説で、ドキドキしながら読めた。
- ・ 自分の意見が人の意見と同じ面もあれば違う面もあったので、意外とおもしろかったです。なるほど！と思いました。今日の物語はミステリアスな感じで読者に考えさせるような内容で奥深い話だなあと思いました。
- ・ 話の内容は分かっているけど、いざ何故か？ という質問をされると、なかなか探し出すのがむずかしかった。話は最後にオチが分かるようになっていておもしろかった。
- ・ なんの色々と、物語の中にも物語があるとわかった。
- ・ 一つの小説からいろんな意見が出るんだなあと思った。同じ小説なのにみんな意見が違っていておもしろいと思った。答えが一つじゃないから自分の意見が言いやすい。
- ・ 根拠とかよくわからなくてむずかしかった。
- ・ どうしてこんな考え方になるのかということは出せても、根拠をうまく出すことができなかった。もう少し根拠を探してから考えてみようと思う。
- ・ みんな一人一人ちがう考えがあるんだなあと思った。
- ・ 他の人の着目点がわかったし、出前家族という案もおもしろかった。
- ・ 発表できなくて残念だった。こんどは自分の考えを言いたい。
- ・ 自分が思った根拠をページから見つけ出すことができなかった。いろいろな人の意見を聞くことができよかった。
- ・ 今回の前のフランス料理店の話よりもまだ考えやすかった。でもこの話はなんか重い感じがした。
- ・ みんなの意見と自分の考えた意見が似ていた。論理的に考えるのに慣れてきた。
- ・ すごくシリアスな話だったけど、最後は謎が解けたような感じがしておもしろかったです。この続きとかもあったりするのかなあとか、読んでいるときに先はどうなるのかなあとかいろいろ考えることができました。なんか難しかったけど、楽しかったです。

【教材2】「マスクメロン」生徒自己評価(101人)

A よくできた B できた C あまりできなかった D できなかった

	A	B	C	D	未回答
感覚的であることと論理的であることの区別ができたか	23人 (22.8%)	52人 (51.5%)	25人 (24.8%)	1人 (1.0%)	0人 (0.0%)
自分の考えを述べる際、その根拠を作品の中に見出すことができたか	21人 (20.8%)	43人 (42.6%)	33人 (32.7%)	3人 (3.0%)	1人 (1.0%)
根拠を交えた自分の意見をわかりやすく整理し、説明できたか。	9人 (8.9%)	38人 (37.6%)	38人 (37.6%)	14人 (13.9%)	2人 (2.0%)

平成17年度 課題研究講座「高等学校における国語教材の充実」 研究の流れ

回	実施期日	内 容	備 考
	5月24日(火)	課題研究講座 申込締切	論理的思考力の育成をテーマに研究メンバーを募集する。
1	6月21日(火) 13:30～17:00 総合教育センター	課題研究講座 開講式 協議(現状分析・研究の方向性について)	開講式の後、第1回の協議に入る。論理的思考力にかかわって、問題意識を整理する。
2	7月4日(月) 10:00～16:00 総合教育センター	町田守弘先生 講義・助言 「論理的思考力育成のための教材開発について」 ・論理的思考力が話題になる背景 ・論理的思考力育成のための教材検討 ・教科書編集の現場から ～教材開発の留意点	論理的思考力育成のための教材開発についてご講義いただき、お示しいただいた3作品について実際に検討を行う。 素材を探すにあたっての方向性、留意点を確認する。
3	8月16日(火) 9:00～17:00 総合教育センター	教材の候補を持ち寄って協議	第2回に確認したことを踏まえて、それぞれが教材の候補を持ち寄る。その素材を選んだ意図、学習の手引きを提示し、協議した。
4	8月29日(月) 10:00～16:00 総合教育センター	町田守弘先生 講義・助言 ・講義「論理的思考力育成のための教材および評価について」 ・前回持ち寄った候補の再検討と選定 ・素材の「教材化」と授業構想 ・今後の課題 ～研究をどうまとめるか	持ち寄った素材のそれぞれについて、教材として好ましい点、問題のある点をご助言いただく。協議の上、二つの素材を選定し、「教材化」および授業構想の方向を決定する。
	9月20日(火) 9月29日(木) 10月11日(火) 10月13日(木) 総合教育センター	グループ協議 【教材1】本文の検討 【教材2】本文の検討 【教材1】授業プラン作成 【教材2】授業プラン作成	グループに分かれ、それぞれ本文(ルビ・注釈・著者紹介など)および学習の手引きの検討を行う。ワークシートと指導案も作成する。 本文の案が固まった時点で著作権の利用許諾申請を行う。

回	実施期日	内 容	備 考
5	10月19日(水) 9:00～17:00 総合教育センター	授業プランの最終検討 評価・授業記録の確認	グループで作成した案をもとに、全体で検討する。授業での生徒の反応や自己評価、うまくいった点、改善を要する点などは「授業記録シート」に記録し、12月に持ち寄ることとした。
	10月下旬 ～12月	各学校での授業実践 公開：10/21 10/27（久居高等学校） 11/12（桑名工業高等学校） 11/14（亀山高等学校）	可能な範囲で公開、見学する。途中、授業実践の結果を踏まえてテキストとワークシートを一部改訂する。
6	12月2日(金) 9:00～12:00 総合教育センター	授業実践報告および協議 研究成果報告書のまとめに向けて	授業記録シートを持ち寄って実践報告を行うとともに、研究成果報告書のまとめに向けて協議する。
7	12月26日(月) 10:00～17:00 総合教育センター	町田守弘先生 講義・助言 ・授業実践報告 ・研究をまとめるにあたって ・講義「大学における教師教育」 「声の復権と国語教育の活性化」	授業実践の内容、研究の総括についてご助言いただく。さらに、今後の教材開発と授業構想につながるテーマでご講義いただいた。
	1月23日(月) 10:00～16:00 亀山高等学校	「授業改善のための実践研修講座【国語】」実施 (三重県高等学校国語教育研究会との共催) ・公開授業および研究協議・講評 ・町田守弘先生 講演 「国語科の教材開発と授業開発」	開発した教材を用いた授業を公開し、教材および授業構想について研究協議を行う。町田先生にご講評、ご講演いただく。
8	2月6日(月) 9:00～17:00 総合教育センター	研究成果報告書原稿を持ち寄って協議	執筆した原稿をもとに細部を検討する。

平成17年度 課題研究講座
「高等学校における国語教材の充実」
共同研究者

< 研究協力者 >

県立桑名工業高等学校	葛原 義和
県立亀山高等学校	澤口 哲弥
県立津西高等学校	岡田 恭子
県立久居高等学校	岩佐 真由美

< 三重県教育委員会事務局 >

研修企画室主幹	落合 英次
研修指導室研修主事	谷口 勝彦
研修指導室研修員	矢田 智子
研修企画室研修員	倉田 容子

< 指導・助言 >

早稲田大学教育・総合科学学術院
教授 町田 守弘